
仮面ライダーディケイド

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

#仮面ライダーディケイド

【Nコード】

N0252H

【作者名】

天使

【あらすじ】

この作品は、ディケイドや他のライダーだけでなく他の漫画、アニメをクロスしました。

プロローグ：「無数の世界への旅立ち」(前書き)

最後の方にクロスしています。

プロローグ：「無数の世界への旅立ち」

世界の破壊者ディケイド……その目に映るものは何か……

一人の少女が荒野に立っていた。

ドーン!!

突如爆発が四方から聞こえてきた。

ヴウウウウウウウウウウンンンンンン!!!!!!

彼女の後ろからバイクの音と共に仮面を着けた人々がバイクに乗って彼女の前を通り過ぎていく。

彼らは、仮面ライダーと呼ばれる戦士である。

彼らが向かった方に奇妙な姿の仮面ライダーがいる。

「「「「「覚悟しろ!!ディケイドオオ!!!!!!!」「「「「「

仮面ライダー達は、ディケイドに自らの必殺技を繰り出すとした。

だが………

「「「「「グワアアアアアアア!!!!!!!!!!」「「「「「

ディケイドが、腕一本で全てのライダーの必殺技を跳ね返した。

その腕一本から出た威力で砂煙が舞い上がる。

煙が収まると沢山のライダーが無残にも息絶えていた。

ディケイドが去ろうとした時

「待てえ！！ディケイド！！」

ディケイドの攻撃を喰らって生きていたライダーがいた。

「クウガか・・・」

クウガが腰を構えるとクウガのベルトが黒く光り出した。

そして、黒いクウガ。アルティメットフォームに変わった。

「うおおお！！！！」

クウガの拳から黒いオーラの籠った正拳が放たれた。

ディケイドも赤く光る拳を放った。

すると、目の前が真っ暗になり目を覚ました。

「またあの夢？」

彼女の顔から冷や汗を流していた。

最近嫌な夢をよく見る。

「可憐くまた寝坊か！！置いて行くぞ！！」

可憐が目覚ましを見ると7：30であった。

「え？嫌だ！！もうこんな時間なの！！？って待てえ滅也！！」

急いで身なりの整頓や顔を整えた。

急いで家を出ると何時もの様に彼、大空滅也がいた。

「まったく・・・寝坊の癖は直せって言っているだろう？」

二人は、何時もの様に遅刻ギリギリ間に合う様に全力疾走していた。

「ごめん・・・滅也・・・」

滅也に申し訳なさそうな顔をしているのが海妙寺可憐。

モデルのように長身で170cmのポニーテールの似合う高校2年生であった。

もう一方の青年は、可憐より背が高い男前の同じクラスの2年で幼馴染の大空滅也である。

・・・ディケイド・・・

「ん？」

滅也は、後ろを振り向いて立ち止まった。しかし誰も居ない。

「おい、可憐。今、呼んだか？」

「え？ううん。呼んでないけど・・・どうしたの滅也？」

ビルを滅也が見ると・・・

ドーンンン！！！！

「！！！！？？？？」

ビルが行き成り爆発をした。

そのビルの奥から巨大な蜘蛛や巨大なエイが出てきた。

そして、彼らの目の前には、獣の姿をした人間が複数に出現した。

二人が逃げようとする二人の間に大きな見えない壁が出現した。

「可憐！！！！」

ドンドンドン！！！！

滅也は、壁を割ろうとするが全く割れない。

「滅也！！！！」

可憐も壁を割ろうとしたが壊せない。

ドーン！！

滅也は、見えない壁を力一杯蹴った。

「くそっ！どうしたら良いんだ！！??？」

「……………デイケイド……………」

滅也が振り向くと其処に黒いローブを着て顔の見えない男が立っていた。

「お前！一体何者だ！？」

「……………今貴方に私の紹介している暇はありません。単刀直入に言います。貴方のデイケイドの世界は、滅びようとしています。……………」

「?どう言う意味だ!?!」

いきなり宇宙空間になった。

滅也は、息を止めたが

「……………心配要りません。此処は、私の見せている宇宙の映像です。……………」

男が指を指す方向を見ると

「!!!!???な、何なんだこれは?!?!」

滅也の見た物は、無数の地球が一つの地球に集まろうとしていた。

．．．．．この世界には、無数の地球、つまりパラレルワールドが存在します。その一つ一つには、それぞれの仮面ライダーが守護しています。しかし、今その世界が一つに成り掛けようとしています。このままでは、貴方の世界だけでなく沢山の世界が滅んでしまいます。そこで、貴方には、この世界の仮面ライダーディケイドに成ってもらい世界を救って貰いたいです。．．．．．

ピュン！

男は、滅也にバックルとカードケースを投げて渡した。

．．．．．頼みましたよ．．．．．

男は、映像と共に消えていった。

気付くとさっきの場面に戻っていた。

片手を見てみると其処にさっきのバックルとカードケースを持っていた。

「め、滅也！！！」

振り向くと可憐がああ獣の人間に首を絞め殺されそうに成っていた。

「くそ！仕方ない！！！」

滅也は、バックルをお腹の中央に付けると腰にベルトが巻かれた。

そしてカードをディケイドのカードをバツクルに挿入した。

「変身!!」

ーカメン・ライド・ディケイドー

ディケイドは、見えない壁を見事に破り可憐を殺そうとしている獣人：グロンギに回し蹴りした。

「ビ、ビガラバゼクウガガ!？」

(き、貴様何故クウガか!?)

グロンギは、体勢を立て直すとそのままディケイドに襲い掛かるうとした。

「仕方ない、奴らの世界の仮面ライダーに変わるか……」

ケースの中には、ディケイドとクウガ以外のカードは、真っ白なブランクカードだった。

ケースからクウガのカードを取り出した。

ーカメン・フォームライド・クウガ!ー

「超変身!!!」

ディケイドの姿から赤と黒のクワガタの仮面ライダーになった。

滅也は、瞬時に他のカードをベルトに挿入した。

「カメン・フォームライド・クウガ・タイタン……」

赤と黒から銀色と紫に成り片手には、大きな大剣を持っていた。

グロンギ達が攻撃したが、全く効いていない。

そして、タイタンソードで決めて倒した。

それを見ていた可憐に滅也は、変身を解き向かってきた。

すると、クウガのカードを見た瞬間絵柄が真っ白になりブランクカードになった。

「大丈夫か？可憐？」

可憐も不安に成っていた。

まさか、あの夢が現実になり滅也が仮面ライダーディケイドに成ってしまったからだ。

「とりあえずこんな状況だ……お前の家に寄るか？こんな所にいるも危険だからな。」

「そうだね。」

可憐は、滅也の言う通り可憐の家、海妙寺に向かった。

ガラ！

可憐が、家の中に入るとテレビのノイズが聞こえて見てみると其処にテレビの調子を見る可憐の祖父、海妙寺秀作がいた。

「おお可憐！お帰り。今日は、早いな。どうしたんだ？あ、ちょうど良かった滅也君。テレビ見てくれないかな？どうも、調子が悪いらしいんだよ。」

この海妙寺秀作は、メカが苦手な可憐の祖父であり、またこの海妙寺の御就職でもある。

可憐の家族は、昔、両親が海外で仕事中に事故で亡くなり。その代わりこの秀作が親代わりに育ててきた。

滅也がテレビを修理していると、秀作は、お茶を入れようとしたが開ける扉に何かが引掛かっている。

「あれ？おかしいな・・・えい！」

秀作は、カ一杯引くと其処から巨大な絵巻が壁に現れた。

そこに、写っていた絵は、町の絵とパトカー、そしてタロットカードの様なカードが無数に書かれていた。

可憐が、不思議にそのカードの絵柄を見てみるとガードには「セイバー」「ランサー」「キヤスター」「アーチャー」「バーサーカー」などの名前が刻まれていた。

滅也は、不思議に思い。ハッ！つと思い出した。

「これって・・・まさかフェイトノステイトナイトの出てくるキャラだ！」

可憐は、滅也が何を言っているのか分からなかった。

「ねえ滅也？何なのフェイトノステイトナイトって？こつ言つの好きだよな。」

「ああ、オレの持っている漫画の世界らしいな。多分オレ達が旅する無数の世界の一つらしい」

一方その頃この世界の廃墟の工場では、青い鎧を着た外人の金髪の少女と黒と赤の仮面ライダークウガが共に敵であるグロンギとキヤスターと戦っていた。

「シロウ！行きますよ！！！」

少女は、金色の聖剣を持って彼に言ったが彼は首を振った。

「セイバー！今は、その名前はやめてくれ・・・今は、仮面ライダークウガだからな。」

セイバーは、彼の自信に満ちた後姿に安心していた。

「はい！行きますよ！クウガ！！！」

二人は、キヤスター達に掛かった。

プロローグ：「無数の世界への旅立ち」（後書き）

次回仮面ライダーディケイド

「雑種よ王との差を見せ付けてやる！！」「苦しくてもその過去を背負って生きなければならない。それが本当の強さだから。」

「それぞれの過去」

全てを破壊し、全てを繋げ！！！！

1話：「それぞれの過去」(前書き)

士郎がセイバーをギルガメッシュに半殺しにされて英雄以上になります。

1話：「それぞれの過去」

世界の破壊者デイケイド……その瞳に何が写るものは何か……

滅也は、可憐の家を出ると滅也の制服が警官の制服に変わった。

可憐は、滅也の服を見て笑い出した。

「アハツハツハツハツ！！何？滅也そのカツコ？」

「どうしたんだ可憐……ん？？な、なんじゃああこれりやあああ！！！」

無論本人も驚いていた。服を調べると大空滅也巡査と書かれた警察手帳が現れた。

「この世界の滅也の役割って？」

「多分、グロンギと聖杯戦争に関係しているだろう。」

「セイハイセンソウ？何それ？」

可憐は、また専門用語に疑問を感じて滅也に質問した。

「ああ、この世界は、9人の魔導師とサーヴァントと呼ばれる9体の英霊を戦わせて聖杯を貰う為に勝ち取るゲームだ。」

「どうして、そんな事をするの？」

「聖杯には、何でも願いの叶う万能の品らしい。」

滅也が可憐に答えると町が騒がしい。

「ん、何だ町から騒がしいぞ？」

可憐は、滅也の前に出て手を引つ張った。

町の中に入ると警察が民間人をこれ以上入れない様にKEEP O
UTと書かれた黄色い線を引いて止めている。

可憐も入ろうとしたが、警官に邪魔されて入れなかったが、滅也が
警察手帳を見せて入れた。

「あ、滅也！！！」

可憐も入ろうとしたがまた警官に邪魔された。

滅也は、可憐に片手でゴメンの合図を出して奥に入っていった。

可憐は、顔を真っ赤にしてキーーーーー！！と悔しがっていた。

可憐は、仕方なく家に戻った。

そんな中、中に潜入した滅也は、廃墟の工場で二人の男と女がサー
ヴァントとクロンギ達と戦っていた。

「あれが、この世界の仮面ライダークウガ・・・」

ここは、海妙寺家……

「此処って本当に別の世界なの？」

秀作は、テレビを掛けると其処には、あのグロンギ達と戦っている男女が写っていた。

秀作は、新聞を見ると記事に『未確認生命体また女性警官を襲う』と言う物が書かれていた。

「確かに違う世界に来てしまったようね……」

「それだけじゃない。」

突如滅也が家に戻ってきてきて号外の新聞を持って可憐に見せた。

「これって？」

『未確認生命体4号現る！！』とクウガの絵が載っている新聞を見て驚いた。

「私達の世界を救うには、無数の世界を旅しなければならないの？」

「そう言う事だ。」

可憐は。無数と聞いただけで気迷いそうな気分になっていた。

「でもこの世界でどうすればいいの……」

「これは、オレの推測だがこのカツコは、この世界でのオレの役割らしい。そして、オレはこの世界で何かしなければ成らない。」

滅也は、警官帽子を脱ぎ真面目な目に変わった。

「つまり警官って事は、グロンギやサーヴァントと対決するって事だ。」

滅也は、そのまま家を出たのを気付いた可憐は、追いかけた。

外に止まっていた滅也の警官の自転車に乗りまた何処かに行ってしまった。

しかし、彼女は、驚いたのは、後ろを振り向いた瞬間だった。

民家と可憐の家の海妙寺が付いている状態に目をやった。

「わ・・・我が家があああああああ！！！！！」

可憐は、グロンギや聖杯戦争よりも深刻な問題に頭を抱えた。

そして現場に戻った滅也は、何故か他の警官の姿が無く工場には、クウガとセイバーが戦っていた。

クウガは、グロンギ達を相手にしていた。セイバーは、グロンギ達に指示しているキャスターを相手にしていた。

滅也は、工場の入り口で二人の観察をしていた。

クウガは、腰を構えているとベルトが青く光りだした。

「超変身！！！」

クウガは、赤から青に変化した。

クウガは、隅にあった鉄パイプを持つとドラゴン・ロットに変化させた。

そして向こうでキャスターと戦っているセイバーも見えない武器で戦っていた。

「あい変わらず槍だか斧だか剣だか解らない武器を使用しているわねセイバー？」

セイバーの闘いを見ていて当然だと思っている。

(当たり前だ！セイバーは、アーサー王だからな。たとえキャスターがメディアでも叶うはずが無い格闘の英雄だぞ！！)

何故か自信を持って思う滅也であった。

しかし、キャスターは、懐から紫の魔法石を取り出した。

そこから、白い煙が立ち上がった。

「撤退よ。勝負は、お預けねセイバー……フフフフフアハハハハハハハハハハ！！！！！！」

セイバーは、煙が収まると後ろに二体のグロンギが残っていた。セイバーに襲い掛かってくるが

ズザ！

クウガのドラゴン・ロットの先が見事心臓に命中して爆発した。

残った一体は、ジャンプして空に向かって天井を壊して逃げようとしたが

「逃がすか！！投影・開始」
トレス・オン

クウガは、手から銃に似た鉄を具現化した。

（なるほど・・・状況に応じて形態を変えて触れた自分の武器を形成できるのか。それにしてもアノ技は・・・！！まさか！！）

クウガは、銃を持った瞬間に体が青から緑に変化し銃も緑のボウガン：ペガサス・ボウガンに変化した。

クウガも天井にジャンプして屋上に移動して空中で逃げるグロンギをペガサス・ボウガンで撃った。

撃ち放たれた高空圧の弾は、見事命中した。

ドカカカカアアアンン！！！！

グロンギも爆発してしまった。

・・・

「なるほど、お前の特有のイメージした物を具現化してそれでフォームに変われるのかクウガいや衛宮士郎。」

クウガが振り向くと滅也が立っていた。

咄嗟にクウガの前にセイバーが来て見えない武器を構えて滅也の前に立った。

「安心しろ。オレは、こんなカツコだが警察じゃない」

「何を言う！そう言って私たちを騙すだろう！さては、魔術師か！サーヴァントは何処に?!」

セイバーは、滅也に警戒していた。

「だから、オレは、警官でも魔術師でも無い。」

しかし、セイバーは、それでも構えている。

クウガの手がセイバーを阻んだ。

「止すんだセイバー。」

「しかし・・・」

「だったら、今霊呪を使っても良いんだぞ？」

セイバーは、クウガに呆れて構えを解いた。

「シロウは、人が良すぎます……」

セイバーは、ため息交じりの言葉で士郎に言った。

クウガは、変身を解いて滅也に向かった。

此処は、衛宮家

滅也は、茶の間で正座を二人と同じ様にしていた。

「俺は、信じられないが此処の世界の人じゃない。」

「どう言うことだ。」

「お前らの言う魔術師なんて者でもない。現に魔術なんて使えないし使った事が無い。」

「魔術師じゃないなんて、一体君は、何者なんだ？」

「ただの旅人だ……こんなカッコだけだな。それとお前らの過去を聞かせてもらいたい。」

二人は、急に暗い顔になった。

「まあ、だいたいお前らの過去を悪いが調べてもらった。衛宮士郎、10年前の前の聖杯戦争で両親を亡くしてその後衛宮桐継に引き取られた。そしてヒーローに成ると言う面白い夢を持っている。そしてセイバー、真名はアルトリア・アーサー・ペンドラゴン最初に聖剣：エクスカリバーを引き抜いた無敵の英雄。聖杯戦争で願いを

叶える事は、自分の犯した過去を変えるため……か……」

「貴方は、何故シロウの過去や私の過去を知っているのですか!?!」
セイバーの反論が始まった。

それもその筈、セイバーの過去を教えたのは、士郎だけだった。

「言っただろ？俺は、ただの旅人。情報は、得意なんだ。」

滅也は、正座から立ち上がって庭を見ながら言った。

「苦しくてもその過去を背負って生きなければならない。それが本当の強さだから。」

「それは、どう言う……ん!?!」

士郎が詳しく話そうとした時、外からパトカーのサイレンが聞こえた。

士郎は、目つきが変わり走り出した。

「おい！何か話かけていたのにどうしたんだ!?!」

滅也は、士郎達を追いかけてバイクで士郎が止まった。

「ごめん!!!今、取り込み中になったんだ！行くぞセイバー!!!」

「はい！シロウ……!」

「貴様がグロンギ達を倒している雑種か・・・」

「貴方は!!!」

セイバーは、声の主に驚いた。

「久しぶりだなセイバー・・・ようやく貴様を我の物にする時がやって来たのだ。」

笑って出て来たのは、褐色で金髪の男であった。その体には、黄金の鎧で包まれてた。

「何だ？我を忘れたのか？」

「ギルガメツシュ!!!」

士郎もその言葉に聞き覚えがある。最古ほ英雄王：ギルガメツシュの話。

「シロウ！此処は、私に・・・」

しかし、士郎は、セイバーの隣にいてギルガメツシュの目の前にたつた。

「何言つてやがる。相手は、最古の英雄王だぞ。俺も戦う!」

士郎は、腰からクウガのベルトを出して構えた。

セイバーも見えない武器から黄金の剣：エクスカリバーを出した。

「超変身!!!」

士郎は、クウガに変身してギルガメツシュにジャンプしてキックをしたがギルガメツシュは、後ろから無数の武器により跳ね飛ばされた。

「雑種よ王との差を見せ付けてやる!!!」

また、後ろから無数の武器が士郎に襲い掛かるうとした。

セイバーは、ギルガメツシュの懐に回りこみ剣を振った。

ギイーン!!!

「!!!」

しかし、ギルガメツシュの片手には、剣がガードして攻撃を防がれた。

「どうした、ツメが甘いぞセイバー。」

セイバーを振り払った。

後ろでクウガがマイティ・ライダーキックを放ったが……

ティーン!

ブシューウウウウ!!!

ギルガメツシュが指を鳴らすとクウガの腹部から大量の血を流した。

「グアアアア!!」

クウガは、地面に倒れて痛みを抑えながら変身を解いた。

「ギ・・ギルガメツシュウウウ!!」

それを見たセイバーは、魔力の籠った剣をギルガメツシュの剣に放った。

セイバーが付けた攻撃で彼の剣に刃こぼれた。

「さすがは、獅子だな・・・それでこそ我の女に相應しい。その剣に免じそれ相應の武器で戦ってやるぞ。この英雄王しか持ち得ない剣エアでな、王の財産ゲイト・オブ・バヒロン!!」

ギルガメツシュは、後ろから漆黒の刃を持つ黄金の剣を取り出した。

「だ・・駄目だ逃げろセイバー・・・」

地面で倒れている士郎が言った。

しかし、この二人の緊迫は、ますます深まって行った。

「どうした?手加減しなくて良いぞ!そうでなければ面白くない。」

ギルガメツシュは、彼女に挑発してきた。

「エクス」

「エヌマ」

「カリバアアアアア！！！！」

「エリシユウウウウ！！！！」

二人の魔力の籠った攻撃が衝突し煙が舞い上がった。

それぞれの姿が見えなくなった。

そして、煙からセイバーが押され飛ばされた。

士郎の目に写る物がゆっくり動いていた。

「セ・・・セイバアアアアア！！」

士郎は、思わず叫んだ。

「フワハツハツハツハツハツ！！！！人類最強の剣とは、この程度とは。」

ギルガメツシュは、廃人寸前のセイバーを見下ろすかの如く馬鹿に笑って言った。

「おい！セイバー！しっかりしろ！！セイバー！！！」

士郎は、懸命に呼びかけた。

セイバーも士郎の声に気付いたのか、片腕を動き始めた。

「シ・・・シロウ・・・シロウなのですね・・・そこに・・・いるのは・・・?」

「お・・・お前・・・目が!」

更に驚いた事にさっきの闘いでセイバーの目が見えなくなっていた。

・・・許さない!!セイバーを・・・よくもセイバーを・・・!!

士郎は、ギルガメツシュの笑い声で今までに無い怒りが生まれてきた。

士郎は、セイバーの剣を持ちギルガメツシュに斬りかかろうとしたがギルガメツシュは、また違う剣を取り出した。

「面白い事を教えてやろう雑種・・・セイバーの剣：エクスカリバーは、元は北欧の世界樹ユグドラシルに流れた物・・・これは更に源流・・・レプリカは、原型には勝てぬ!!」

ギインンン!!

「!!??」

ギルガメツシュは、士郎に斬り付けた所を見ると肩から腕まで銀と紫の鎧に変わりエクスカリバーも変化していた。

士郎のベルトから紫に光りだしていた。

「変身!!」

士郎は、クウガ・タイタンフォームに成った。

そのまま、タイタンソードに変わったエクスカリバーで斬り上げた。持っていた剣を斬られてつかさずギルガメツシュは、後ろに下がった。

「まさか、貴様がクウガか雑種！！・・・王の財産！！」
ゲイト・オブ・バビロン

無数の武器がクウガに発射されたが、クウガの体が、この最も頑丈なタイタンフォームで全て弾いて一歩一歩前に進み追い詰めた。

そして、クウガがタイタンソードで斬りかかったその時！！

ブシューウウウウ！！

「！！」

クウガは、お腹を見るとギルガメツシュのエアが刺さっていた。

「さすがの我でもクウガの攻撃でまた前世の様に死ぬのは、ごめんだからな・・・」

ギルガメツシュの顔に一滴の冷や汗が流れた。

エアを抜くとクウガの変身の解けた士郎を力一杯蹴りセイバーよりも後ろに飛ばされた。

セイバーは、後ろに飛ばされた士郎を感じた。

「!!!? シロウ!!! ギルガメツシュ! 貴方は、私に様があるのでしよう!?!」

「それは、つまり私の女に成ると言う事がセイバー?」

ギルガメツシュは、口をニヤリと笑って言った。

「それは・・・言うな!!! セイバー!!!」・・・シロウ・・・」

「その通りだセイバー!。こんな男の物に成ったら幸せな生活なんかできないぞ。」

教会の扉から声がした。

振り向くと仮面ライダーデイケイドがいた。

「新しい雑種が現れたか! 何処から来た!?!」

「なぐに・・・裏ドアから来たらグバグバうるさい奴がいたから此処に来る前に始末しておいた。」

ギルガメツシュは、デイケイドを睨んだ。

「キサマ・・・何者だ!?!」

「ただの通りすがりの仮面ライダーだ覚えておけ! それに二人は、戦えないから代わりにオレが戦ってやる。」

デイケイドは、腰のカードケースからカードを取り出すとバツクル

に挿入した。

「アタックライド・スラッシュー

ディケイドは、ギルガメッシュの王の財産を軽々かわし懐まで来て振った。

しかし、エアによって防がれた。

「死ね雑種！」

「どうかな？」

片手で剣を持ったままもう一方の片手でカードを挿入した。

「アタックライド・イリユージョー

ギルガメッシュのエアが当たる時幻影に変わりその後ろをディケイドは斬りつける。

「くっ！小賢しいマネを！！」

またエアを斬ろうとしても同じようにかわされ斬られた。

それを見ていた士郎は、その光景に唾然とした。

止めを刺されそうに成った時、ギルガメッシュは、消えた。

「心配が無くなったか・・・逃げた様だな」

「!!!??」

士郎は、その姿を見たとき驚いた。

「そうか・・・お前がディケイド。」

士郎は、傷ついた身体で立ち上がり腰にベルトを出した。

クウガに変身してディケイドに空中からジャンプしてパンチを当てた。

「痛!いきなり何だ!!!?」

それでもクウガは、攻撃を続行した。

「聞いていた通りだな!悪魔!!!」

「何が悪魔だ!!!」

「いつか現れるって聞いていた!全てのライダーを倒す為に!!!」

「何だとおお!!!?」

クウガは、そのままディケイドを持って教会の礼拝に向かって行った。

つかさずディケイドもクウガに向かって渾身の拳を放った。

飛ばされたクウガは、礼拝堂の奥からキャンドルを取って紫の光がベルトから光りだしてタイタンに変わった。

「仕方ない。戦ってみるか・・・」

カードを取り出して挿入した。

「アタックライド・スラッシュユー

斬り合いに成ろうとしていた時、見えない壁が現れた。

二人を通り過ぎると礼拝堂には、緑と灰色のバツタの仮面ライダーが現れた。

「アニキ此処にも居たよライダーが・・・」

灰色のライダーが喋ると緑のライダーも頷いた。

「ああ・・・行くぜ・・・相棒・・・」

緑のライダーは、クウガを。灰色のライダーは、ディケイドに攻撃を始めた。

その頃海妙寺家では

「もう！滅也つたら遅いな、仕方ない迎えに行こ。」

可憐は、家を後にした。

1話：「それぞれの過去」(後書き)

次回仮面ライダーディケイド

「滅也！その人と戦っちゃいけない！」

「いらぬそんな物・・・例え過去をやり直せるとしてもあの涙もあの記憶もあの胸を抉る現実の冷たさもその人達の命の重さを刻み込まなきゃいけないんだ！！」

「聖杯は、欲しい。だが、シロウは、殺せない。私は、ただシロウが欲しいのだ。」 「思いが礎となってるだから忘れる訳にはいかない！」

「決断」

全てを破壊し、全てを繋げ！！！！

2話：「決断」(前書き)

オリジナルのディケイドのカードも出てきます。

2話：「決断」

世界の破壊者デイケイド……その瞳に何が写るものは何か……

可憐は、滅也を探して街道を走っていると教会から人の声が微かに聞こえてきた。

（もしかしたら、あそこに滅也が居るのかも！！）

可憐は、急いで教会の方に走って行った。

デイケイドは、緑のライダー：キックホッパーと戦っている。

「はっ！」

「ふん！」

その後ろでクウガとパンチホッパーが同じ様に戦っている様だ。

クウガとデイケイドがお互いの背中が合わさるとクウガが質問をしてきた。

「これも、お前の仕業か！？」

「知らねえよ！！ぐ！」

話しているとキックホッパーがデイケイドに回し蹴りをして来た。

一方、クウガは、ベルトを青く光らせていた。

「超変身!!!」

タイタンフォームからドラゴンフォームに変わってアッパーホッパーを圧倒して笑った。

それを見たキックホッパーは、クウガに振り向いた。

「今、相棒を笑ったな〜!!!」

デイケイドを踵落としてクウガに向かって行き飛び蹴りをした。

「笑ったな!笑ったな!!!」

二人ががりでクウガをリンチしていると

ドン!ドン!ドン!!!

「お前ら何処から来たんだ?」

「地獄からだ・・・」

「お前も来い・・・」

デイケイドが二人に質問すると見えない壁がまた来た。

「へっ!行こうよアニキ・・・」

「ああ、また別の地獄が待っている」

二人は、見えない壁に飛び込むと消えてしまった。

「何だっただんだ？あいつ等・・・ん！？」

クウガがダイケイドに向かって殴ろうとした時

「滅也！その人と戦っちゃいけない！」

その声にクウガも体を止めた。

数分後お互いの変身を解くと二人は、驚いた。

「お前は！」

「アンタは！・・・アタタタタ！！！」

「痛い痛い！！やめろ可憐！！お前！合気道二段なんだからさ！！」

「アタタタ・・・俺もやめてくれないか？一応怪我人なんだから！」

可憐は、士郎と滅也の腕を捻って彼らも悲願していた。

「滅也！アンタの使命は！？」

「無数の世界を巡ってオレらの世界を救う事・・・だからヤメテ！」

「そっだよ！他のライダーと戦うことじゃないでしょ！！それと君

も何で滅也を襲ったの言いなさい!!」

可憐は、士郎を更に捻った。

「わかった、わかったから、もうしないから腕を解いてくれ!!」

士郎の腕を解いて事情を聞いた。

「聖杯戦争でセイバーと出会う直前に家の蔵からこのベルトを見つけたんだ。なんでも親父の形見だったらしくて興味本意で付けたらベルトが喋ったんだ・・・」

『クウガヨデイケイドニハ、キョウツケロ・・・スベテノライダートセカイヲホロボスアクマダ』

「っと言ってそれっきり喋らなくなったんだ。それよりもセイバーが重症なんだ近くに家があれば良いんだが・・・」

腕を捻られて痛かった滅也が口を開いた。

「だったら、可憐の家に行けよ。あそこからなら10分で行ける位だから・・・」

三人は、傷で動けないセイバーを運んだ。

海妙寺家のドアを開けると其処に秀作が立っていた。

「おかえり・・・ってどうしたのこの人達!!」

可憐がセイバーを滅也が士郎を肩に乗つけて帰って来たことに驚い

ていた。

「やっぱり、病院に行ったほうが良いんじゃない？」

「いや、こいつ等は、普通の医者じゃ治せない。」

可憐が言うと滅也が口を挟んだ。

「セイバーは、英霊だから土郎の魔力で直せるはずだ。それに土郎は、身体にセイバーのエクスカリバーの鞘が埋め込まれている。」

「・・・それを何故貴方が知っているのですか・・・」

セイバーが虫の息で滅也に質問した。

「言っただろ？オレは、旅人だ。情報を知るのは、得意なんだよ（漫画全巻読んだ何て信じてはくれないだろうな・・・）」

滅也達は、二人を客用の異室に運び滅也は、土郎を。可憐は、セイバーをそれぞれ解法していた。

翌日ようやく二人が目を覚ました。

「ん？此処は・・・」

土郎は、部屋を見るとセイバーが隣で寝ていた。

「気が付いた様だな。」

セイバーの更に隣には、滅也が胡座をかいていた。

「アンタは、一体何者なんだ？まるで違う世界の人間って感じがして仕方ないんだ。」

滅也も覚悟をして答えた。

「そつだ・・・オレ達は、自分達の世界を救う為にこの世界に来た。」

「自分達のとてまさか本当に！」

「まあ、セイバーが起きたら全てを話す。」

滅也は、部屋を後にした。

士郎は、今も眠っているセイバーの顔を見てこれ以上彼女を傷付けさせる訳には、いなか無いと決断した。

「俺が、お前を守る。安心しろセイバー・・・」

士郎は、寝ているセイバーの唇にキスをして海妙寺家を後にした。

士郎は、今までのグロンギ達の襲った場所を回って解った事がある。

みんな、言峰教会の近くで襲われていた事に気付いた。

士郎は、言峰教会に向かった。

教会の中に入ると誰も居なかった。

（おかしいな・・・いつもなら朝の参例で人が来てもおかしくない時間なのに・・・ん！？）

礼拝堂の椅子の所にシスターが倒れていた。

士郎は、つかさず駆け寄った。

「しっかり！大丈夫ですか！？」

呼びかけると、シスターが目を覚ました。

しかし、様子がおかしく苦しみ始めた。

「た・・・助け・・・グアアアアア！」

シスターの体が黒く光出した。

すると、体が異変を起こしていた。

たちまちカマキリのグロンギになった。

士郎は、後ろに飛び腰を構えると、「良く来たね衛宮士郎。」

士郎は、上の二階を見ると首まで長い髪の中年男性の声の人物がこの聖杯戦争の運営者でもある言峰だった。

「言峰・・・まさか！お前！！」

士郎は、言峰を睨んだ。

「教会でも勝手に入られると考えられ物だがね・・・」

グサ！

士郎は、心臓の辺りを大きな鎌の様な物が刺さっていた。

それは、さっきのシスターの成れの果てグロンギが刺していた。

ズサ！！

士郎は、目の前の景色がぼんやりして来てこの場に倒れた。

「はっ！シロウ！！！！」

セイバーは、目を開けた。

「気付いたか・・・」

「貴方は・・・シロウは！？」

「ああ。そうなんだ・・・さっきから探してしているのにアイツ何処にも居ないんだ？」

セイバーは、昨日の教会の事を思い出した。

「まさか!!!シロウ!!!」

「おい!待てよ!!!」

セイバーは、滅也の声を無視し駆け出して教会の方に向かった。

滅也もセイバーを追いかけて行った。

教会に入るとあまりの澁んだ空気に気付いた。

(此処は、聖なる土地じゃない此処は・・・まるで邪悪の巣くう魔窟そのもの。)

セイバーは、教会の奥に行くと其処に地下室に向かうドアがあった。

セイバーは、その部屋に入ると太郎が倒れていた。

「シロウ!!!」

通り過ぎようとした時、横から鎌が襲ってきて咄嗟に剣と鎌のつばぜり合いになりセイバーの道を塞いだ。

「グロンギか!タア!!!」

「そこまでだ。セイバー。」

セイバーが、グロンギを斬って太郎の所に向かうと声がした。

奥から言峰が士郎の髪を持ってこっちに向かって来た。

「剣を収めるがいい……」

そう言い士郎を投げ飛ばした。

「セイバーがこの男を引き取りに来たと言う事だけであれば引き渡そう。私は、聖杯の持ち主を見極める事だ。」

セイバーは、動揺していた。

「ならば、今聖杯を渡そうか？」

「あれは、聖杯に残った一人じゃないと現れないのでは、無いのかコトミネ!？」

セイバーは、言峰に睨んで抗議した。

「だが器は別だ。今、残っているのは、お前を含め4人だけだ。形だけの聖杯なら手にする事ができるぞ。その為に衛宮士郎。」

言峰は、士郎の髪を持って聞いてきた。

「まずは、お前の言葉を聞きたいのだ。10年前のアノ日、お前は何も恨まなかったのか？」

……10年前……

士郎は、天井から無数の手が現れた。

・・・やめる・・・やめてくれ・・・

(10年前、俺は、前の聖杯戦争で炎の中にいた。しかし、周りには、助けを求めて声がして来た。それでも、俺には、何も出来なかった・・・自分の助けを求めて、必死で生きようとした。もしも、アノ頃に戻るのなら・・・)

「さあ、衛宮士郎。答えを聞かせろ。お前が望むのであれば聖杯を与えよう。」

「お・・・俺は・・・」

・・・苦しくてもその過去を背負って生きなければならない。それが本当の強さだから。・・・

その時、アル男の言葉を思い出した。

「思い出した・・・あの、少し口が悪くてだが不器用な男の言葉を!!」

士郎は、言峰を睨んで言った。

「いらぬ・・・そんな物・・・例え過去をやり直せるとしてもあの涙もあの記憶もあの胸を抉る現実の冷たさもその人達の命の重さを刻み込まなきやいけぬんだ!!」

セイバーは、その答えを聞いて安心した。

「俺が欲しいのはセイバーだ!!」

「その言葉を待っていたぞ士郎!!」

ドアから光が溢れ出てきた。

そこに、滅也がいた。

「しかし・・・口が悪いのは、大きなお世話だな・・・セイバーお前は、どうなんだ?」

滅也は、セイバーに本人のアル言葉を望んでいた。

「聖杯は、欲しい。だが、シロウは、殺せない。私は、ただシロウが欲しいのだ。」

「誰だキサマ!」

言峰は、滅也に質問をした。

「だだの通りすがりの仮面ライダーだ!覚えなくても良い・・・」

滅也は、カードを取り出してバックルに挿入しながら答えた。

「変身!!」

ーカメン・ライド・ディケイドー

言峰は、形成を逆転されて逃げようとしたが

ティーン!!

グサー!!

指を鳴らす音と共に言峰の心臓辺りは、貫通した。

「き・・・きさま・・・何故裏切った・・・マスターのわ・・・た・・・し・・・を・・・」

言峰は、このまま殺した人物の方を向き息絶えた。

「悪く思つな・・・貴様がいたらセイバーを我の物にできなくなると思つたからだ」

そこから出てきたのは、ギルガメツシュであつた。

「おい金髪!!殺したらまたマスターを見つけなくっちゃいけねえだろが。」

「確かに・・・だが我には、そんな事はどうでも良い。」

「な・・・なんだと!?!何を企んでやがるキサマ・・・」

ギルガメツシュの後ろには、無数のグロンギ達がいた。

「雑種よい事を教えてやろう。聖杯をただの願いの叶うおとぎ話に出てくる物ではない。これは、人をグロンギ変えてしまふ呪われた聖杯なのだ。」

ディケイドは、ギルガメツシュの言ったその言葉を思い出した。

「まさか・・・キサマ!!」

地下室に彼の笑い声とグロンギ達の呻き声しか聞こえなかった。

此処は、教会の墓地の辺りで滅也は、辺りが無事を確認するとセイバーに治療している士郎に来た。

「どうやら、逃げきったようだな・・・これからどうするお前ら？」

二人に滅也が質問した。

士郎が立ち上がった。

「決まっている奴の野望を止める！このままだと世界中の人間が戦う事しか考えないグロンギになってしまう。」

士郎が教会に向かおうとしたらセイバーが阻んだ。

「どいてくれセイバー！」

「いいえ、退きません。聖杯の力を使われたら貴方もグロンギに成ってしまいますよ！！」

二人が言い争っている時滅也が先に教会に向かおうとした。

士郎が滅也の肩を持った。

「何処に行くんだ！まさかアノ中に行くんじゃないだろうな！！」

「その通りだ・・・オレは、この世界の人じゃない。もしかしたらグロンギと同じ存在なのかもしれないしな。」

滅也は、そのまま走って向かっていった。

教会の上空にギルガメツシユは飛んで立っていた。

「雑種達よ・・・今こそグロンギと人間が一つになりグロンギと成れ
！！！」

彼は、そのまま聖杯を使うと黒い霧が出てきて教会の外に出ようとしていたが、アタックライド・スラツシユー

剣圧で霧は、後退し聖杯に戻った。

「！！！！？」

よく見るとディケイドがいた。

「此処から先は、オレを倒してから行け・・・」

「小賢しい、行け下僕共！！コイツを倒せ！」

グロンギ達が彼の命令通りディケイドに襲い掛かった。

ディケイドも抵抗したが数が多すぎて攻撃を次ぎ次に受けて変身が解けてしまい困まれた。

「グアアアア！！！」

滅也をグロンギ達は、首を握られ終わりかと思った。

ブウウウウウンンンン！！！！

スパー！！

後ろからクウガがバイクでフロント・アップをしながらグロンギ達をねじ伏せて行き、それに負けずセイバーも剣で斬り付けていく。

「何で来たんだお前ら！！」

クウガとセイバーがディケイドに寄ってきた。

「借りを作つたままでさようならば、気分が悪いんだよ。」

「私も恩を返せないのは騎士の名が汚れます。」

上空にいたギルガメッシュが王の財産を使いゲイト・オブ・バビロングロンギ達諸共ディケイド達を攻撃した。

クウガも変身が解きセイバー同様地面に倒れた。

「これが王の力だ！力無き者は、力有る者にただねじ伏せる！！」

ギルガメッシュは、三人を見下していた。

「それは、違う！！」

滅也は、ギルガメッシュの考えを否定した。

「コイツらは、ただ過去と言う鎖を解いて自分達の様な人を出さない様に戦っている。誰も悲しまない様にする為だ！！」

「何!？」

「自分達が地獄に行ったとしても誰かを救いたい・・・そう信じている!!！」

士郎達は、滅也の言葉を聞き必死で立ち上がった。

「オレは・・・こいつ等を悲しませない様に戦う!!！」

滅也は、ギルガメッシュを見上げて己の信念を言った。

「知っているか?こいつ等の笑顔は、一番良い顔をしている。」

「雑種!お前は、本当は何者だ!？」

滅也は、バツクルを付けてた。

「言っただろ?ただの通りすがりの仮面ライダーってな!行くぞ!!変身!!！」

ーカメン・ライド・ディケイド-

変身した時カードケースからクウガの三枚のカードと新たにカード一枚が出てきた。

ブランク状態だったカードが元のカードに戻った。

そして新しいカードは、セイバー：エクスカリバーと書いてあった。

「士郎、セイバー行くぞ!!！」

「ああ！」

「ええ！」

二人は、彼に頷いた。

士郎もベルトを出して構え、セイバーもエクスカリバーを持って構えた。

「変身！！！」

ディケイドは、クウガとセイバーのカードを挿入した。

「ファイナル・フォームライド・ク・ク・ク・ク・クウガー

「ファイナル・フォームライド・セ・セ・セ・セ・セイバー

「士郎、セイバーちよつとくすぐりたいぞ。」

「「え！？」」

ディケイドが二人の背中に触るとクウガは、クウガゴウラムにセイバーは、セイバーエクスカリバーに変形した。

「「これは……」」

「オレとお前らの力だ！」

上で見ていたギルガメッシュが王の財産をゲイト・オブ・バビロン発射したがクウガゴウラ

ムは、全く効いていない。

ディエイドもエクスカリバーと化したセイバーを持ってクウガゴウラムに乗ってギルガメツシュの居る上空に飛んだ。

「オノレ雑種！！天の鎖エルキドゥ！！！！」

しかし、クウガゴウラムの二本の角がギルガメツシュの天の鎖エルキドゥを綿の糸を千切る様に壊した。

クウガゴウラムは、ディケイドが上空から地上に自ら落ちて無事に着地した。

クウガゴウラムは、ギルガメツシュがエアで斬り付けたが弾かれてしまう。その角でギルガメツシュを挟んだまま地上に急降下した。

その角が離れるとギルガメツシュが更に急降下した。

上空では、クウガゴウラムからクウガに変わってキックの構えのまま急降下を続ける。

地上にいたディケイドは、エクスカリバーを持って居合いの構えになる。

ギルガメツシュが来た所をクウガのキックとエクスカリバーを持つディケイドの攻撃が当たり彼の腹部から真っ赤な鮮血が流れてきた。

そして、ギルガメツシュは、地面に倒れた。

「ま・・・まだだああああ！！！！」

ギルガメツシュは、倒れているグロンギ達を吸収して街に向かってエアからエヌマエリツシュを出そうとしたが、クウガがまたクウガゴウラムに変形して邪魔をした。

デイケイドは、更に二枚カードを挿入した。

ーファイナル・アタックライド・ク・ク・ク・クウガー

ーファイナル・アタックライド・セ・セ・セ・セイバー

クウガゴウラムがギルガメツシュを上空に持って来てデイケイドがエクスカリバーを持ったままギルガメツシュに斬り付けた。

「グアアアアアアアア！！！！」

ギルガメツシュの体のいたる所から出血していた。

「お前は、英雄王と言う名に自ら負けていたんだ。だから、お前は、民に見捨てられたんだ。」

デイケイドは、ギルガメツシュに敗北の原因を語った。

「なら、貴様らの勝利の理由は？」

ギルガメツシュが質問をした。

「誰かの笑顔を守りたいそれだけだ。」

デイケイドの答えに予想していなかった。

「お前にもつと早く出会っていたら・・・そんな事にならずに済んだのにな。セイバーよ・・・」

「何ですか？」

「憎らしい女だ・・・最後まで我に刃向かうか・・・だが・・・許そう・・・手に入らぬからこそ欲しい物がある・・・ではな騎士王・・・いいやなかなか楽し・・・かつ・・・た・・・ぞ・・・」

そう言いギルガメッシュは、消えていった。

・・・覚えているディケイド・・・

木の天辺から彼らを見ている白ローブの女が消えた。

士郎達は、滅也がいない事に気付き探すと教会の入り口の前にいた。

「じゃあなお二人さん!!」

滅也は、走り去っていった。

「シロウ・・・不思議な人でしたね。」

「ああ、まったくだ。セイバー・・・」

二人も衛宮家に帰っていった。

「ただいま。」

滅也は、海妙寺家の扉を開けると可憐がいた。

「あの、二人は？」

「さあな・・・上手くやっけていけるだろう。さあ！この世界での使命は、終わった次に行こう。」

そう言うと絵巻がまた変わった。

絵巻に描かれていたのは、満月が書かれていて、其処に城とドラゴンが混じっているのと銀髪のパンパイアの女のが描かれていた。

「今度は、ロザリオとパンパイアの世界が混じっているらしいな。」

士郎達が歩いて我が家に向かっているとまた見えない壁が二人を飲み込んだ。

2話：「決断」（後書き）

次回仮面ライダーディケイド

「ここがキバの世界か・・・」 「お前の事は、聞いている悪魔！！」

「お前がディケイド！」 「月音こいつキバラーが言っていた奴だよな。」

「士郎君と同じクウガに滅也が・・・！」

〔本能〕

全てを破壊し、全てを繋げ！！！！

3話：「本能」(前書き)

少し面白くなっています。それと滅也が……

3話：「本能」

世界の破壊者ディケイド……その瞳に何が写るものは何か……

「これは……一体!？」

「シロウ気をつけてください!」

景色が回っている事に気付く士郎とセイバーに笑い声が響いた。

「ふふふ……おいで……」

そこに居たのは、白い色の赤い瞳をした蝙蝠であった。

「俺達何処に？」

士郎は、不安に成っていた。

そして現れた場所は、大理石で出来た暖炉にお茶をする為の二つの椅子とテーブルが置いてあり部屋は、まるで城の中の様に成っていた。

バタン!

「!」「!」

奥の扉が開くとそこには、青い狼男に緑の魚人、紫のフランケンシユタインがいた。

その周りには、女性のメイド達と変な姿の執事がいた。

彼らも警戒している様子だった。

「シロウ・・・これは・・・？」

「さあ・・・何なんだ一体・・・？人間と怪物に・・・妖怪？」

一方この世界に来た滅也達は、外を出るとまた服装が変わっていた。

「何の滅也その格好は？」

可憐は、またまた指で滅也を指した。

滅也も見てみるとバイオリンを持っていて服装がまるでホストで働く人の様になっていた。

「そのホスト風の格好は？」

「言うと思った・・・」

滅也も自分が思っていた格好を可憐が言ってしまった。

「また別の世界に来たの？」

可憐は、見渡すと滅也が向こうに指で指した。

「どうしたの？」

可憐も滅也が指した方角を見てみると城の様なビルがドラゴンと融合していた。

「城？ドラゴン？」

また、可憐は、摩訶不思議が物に唾然としていた。

「・・・キャツスル・ドラン・・・」

滅也が言った言葉に可憐は、滅也の顔を見た。

「なんでそんな事知っているの？」

「キバの世界か・・・」

訊ねると言葉を滅也が続ける

滅也の脳裏で仮面が蝙蝠の翼を広げ上半身には、両肩と腹部に鎖を付け下半身も袋脛に鎖を付けた赤と黒、銀の姿をした仮面ライダーが滅也の頭の中で連想した。

「キバ・・・キャツスル・ドラン・・・何でそれを知っているの？」

可憐は、その解らない専門用語に質問した。しかし、次に滅也の言葉の答えに愕然とした。

「あれ？何でその言葉覚えているんだろう？何も知らないのに・・・」

滅也も自分の言葉にどうしてか疑問だった。

可憐の頭の中で夢に出てきたドラゴンがそれに似ている事に思い出していた。

それを考えているのにも無視して滅也は、辺りを確認していると・・・

白いタキシードを着た男が二人に寄って来た。

ドン！

行き成り滅也を退かして可憐に迫り来た。

「は〜い！」

可憐に寄って来た男は、ナンパをして来た様子だった。

「は・・・はい・・・」

可憐は、戸惑って挨拶をすると「ここでお茶しない？」と誘われた。

可憐にナンパしてくる男の様子を見ていると海妙寺家にナンパ男は、可憐を連れて入っていった。

「何なんだ？アイツ？」

滅也も海妙寺家に入っただけだ。

入って見ると男は、何故か戸惑っていた。

「此処って喫茶店じゃありませんでした？」

男の質問に可憐が振り向いた。

「いいえ。ここは、お寺ですけど・・・」

すると奥から秀作が出てきて「粗茶ならできますよ。」と笑って答えた。

秀作が台所に向かうと男は可憐に訪ねてきた。

「すみません此処って老人ホーム？」

二人は、ズツ扱けた。

「違います。此処は、お寺です。」

「あ！良いですね・・・日本の伝統を感じます。」

まあ、そんなやり取りで可憐は、男をお寺の中に案内した。

茶の間に男は、律儀に正座して待ってもらった。

「僕、この頃運が悪いから此処でお払いしてもらおうかな？」

可憐は、男のその言葉で急に目の色を変えて台所の秀作を呼んだ。

「お爺ちゃん！お払いだつて！」

秀作は、ヤカンに水を入れ火を掛ける所に時に可憐が呼んだ。

この海妙寺家の報酬は、お爺さんの秀作で生活が立っていた。

最近は、その仕事も少なく成っており困って会計を担当している可憐であった。

「え？けどお茶を入れる準備しているんだよ。」

秀作は、最後までやらないと気が済まない性格だった。

男は、茶の間にある絵巻を見て近寄ってきた。

「これ良いじゃない。」

男は、絵巻を見て感動した。

「だったらこれに合わせて変えないと・・・。」

ビキビキ！！

男の頬がガラスが砕けた模様が現れた。

二人が振り向くと男は、人間から蜘蛛の怪人に変わった。

二人が緊迫の空気に変わった。しかし、蜘蛛の怪人は、二人に振り

向いて……

「やっぱり、僕の姿とこの絵巻は、絵になるでしょ？」
ナルシストな言葉を出した。

「「いやいや！！それ、違うだろ（でしょ）」！！！！」

その答えに二人は、突っ込んだ。

「随分派手な、着替えだな……」

滅也は、蜘蛛の怪人に歩み寄る。

そして、可憐が滅也よりも先に蜘蛛の怪人に駆け寄ってきて「きゃ
あああああ！！化け物！！！！」巴投げした。

ドカ！

蜘蛛の怪人は、投げられて目を回していた。

数分後、蜘蛛の怪人が起き上がった。

「な、何するつもり！？ファンガイヤだからって追い出すつもり！
？」

蜘蛛の怪人曰くスパイダーファンガイヤは、二人に抗議していた。

滅也は、咄嗟にバックルを付け様としたら秀作が回覧板の板で滅也
を阻んだ。

「ちょっと待った！」

滅也と可憐に回覧板の中身を見せた。

その中身は、『人間と妖怪とファンガイアの集い』と書いてあった紙があった。

「これって？」

可憐が回覧板の中にあつた紙みて驚いた。

「何もしていないファンガイアと妖怪に差別するのは禁止されているんだぞ！！陽海親衛隊に言い付けてやる！！」

スパイダーファンガイアは、外に出て行った。

滅也達は、スパイダーファンガイアを追いかけて外を見ると道を通っている幼稚園児に近づこうとする。

「いけない子供たちが！滅也！！」

可憐が言う前にバックルを付け様としたがあのファンガイアの行動は、二人にさらにおどかさず行動をした。

「うえーん！！うえーん！！」

ファンガイアは、襲うどころか子供たちに泣き付いて来た。

「どうしたの？ファンガイアさん？」

幼稚園児が訊ねると「いじめられたよ〜！ファンガイヤは、人間の家の敷居に入るなって！！」

スパイダーファンガイヤは、後ろを向き二人に指を指した。

「え？でも・・・」

可憐や滅也も戸惑った。

「いけないだ〜！ママが言ってたよ、ファンガイヤさんとようかいさんとは、なかよくしなさいって。」

幼稚園児は、スパイダーファンガイヤの頭を撫でて慰めてあげた。

「う・・・うそ・・・！！」

二人は、目を疑った。

一方此処は、キャッスル・ドランの中で青髪の女性とお河童頭の少女がアル人物を探していた。

「紫そつちは！？」

青髪の女性が尋ねるとお河童頭の少女は、横を振った。

「いいえ、こっちにもいませんでした。胡夢さん。」

紫と胡夢が困っていると階段から髪が少し長い男と桃色の髪の女性が此方に向かって来た。

「こっちは、どうやった？」

男は、関西口調で胡夢と紫に訊ねたが胡夢が首を横に振った。

「しかし！月音に王の継承の件を持ち出すとどっかに行つてまう。何処にいるんや！？」

男は、頭をかきながら悩んでいると桃色の女性がふつと誰かが居ない事に気付いた。

「ねえ紫ちゃん、胡夢ちゃん、ギン先輩・・・みぞれちゃんは？」

桃色の髪の女性、赤夜萌香は、雪女のみぞれが此処にいないのに疑問だった。

「え？アイツなら萌香と一緒にだっただでしょ？」

胡夢は、質問を返した。

「うん。けど、途中でお腹が痛いって言い出したから多分こっちに戻ったと思っただけ・・・」

萌香が他のみんなに説明すると胡夢、紫は、銀影の後ろで怒りの火

が付いた。

「あの、ストーカー女あ!!!」

胡夢からさつきとは、別の空気に変わって外に出て行った。

「月音さんがおの女の毒牙に落ちてしまいますう!!!」

紫も同様に外に向かって行った。

「ギン先輩、私も親衛隊を連れて月音を探してきます。」

萌香も二人の後に続いて外に出て行った。

一人取り残されると何故かため息を吐く銀影の肩にセーラーさんの服を着た少年と筋肉ムキムキの男と士郎とセイバーが来て後ろで無言で軽く叩き頷いた。

滅也達は、この世界の事を調べる為に街を歩いていると一つの古びた屋敷に立ち寄った。

「ねえ滅也。この世界も仮面ライダー以外の世界も混じっているの？」

可憐が質問をして来た。

「ああ、多分ロザリオとバンパイアの世界が混じっている。」

「ロザリオとバンパイア？」

可憐は、また知らない漫画の名前に疑問になっていた。

「ああ、その世界には、妖怪がいて主人公の人間の青野月音と吸血鬼の少女の萌香がメインの漫画だ。」

ゴン！

滅也は、歩いていると何かにぶつかった。

「いたたたあああ！何なんだ？」

滅也が振り向くと屋敷の扉の方に氷の様な髪の女性が此方に眼中に無いのかジーンと屋敷の奥の見ていた。

滅也は、その女性を見た時、すぐさま可憐の腕を引っ張って他人のふりをしていた。

「どうしたの滅也？」

可憐も何故か普通に滅也が人をスルーするのは、考えられない。普段なら、文句言っているのと思う。

「可憐・・・目をアイツに合わせるな・・・こっちまで変態が染るぞ！」

それでも滅也は、彼女に知っている様な顔と言う事は、漫画の登場

人物と言う事だろ。

「滅也、この人どう言うキャラなの？」

可憐は、不安で聞いてきた。

「コイツは、白雪みぞれ・・・主人公のストーカーだ！」

滅也も恐る恐る口を開いて喋った。

「ストーカーってこの人が・・・」

可憐は、滅也の言っている言葉が理解出来なかった。

「すぐに分かる・・・オレらは、後ろから様子を見るぞ・・・」

滅也は、もうしたくないっと言う顔になっていた。

それを見ていると、霧は、屋敷の中に入っていった。

それを追いかけて滅也達も後に続く。

屋敷の中は、ホコリ塗れでありとあらゆる所から蜘蛛の巣が出来ていた。

みぞれは、階段を使い二階に上がったのを見て反対側から上がれる階段を上がって見るとドアが少し開いている。

滅也達は、覗いて見てみると奥に青年が座って悩んでいた。そして奥に居る青年とは違う声が出た。

「月音。なあ、月音。城に帰ろっぜ。萌香達も心配しているぞ。」
黄金の翼を持った赤い瞳の蝙蝠が月音に問いかけた。

「ごめんキバット僕には……」

月音は、また黙り込んだ。

「王に成る事の何処が不安なんだ？」

しかし月音は、キバット・バット3世の答えに無言になったままだった。

「なに話しているの彼ら？……滅也？」

可憐は、無言に成っている滅也の見ている先をみるとそこにはあのストーカー女が反対側のドアから滅也達同様に少し扉を開けて月音を見ていた。

「（え！？何なのアノ人！？何だか……滅也が言った言葉が理解できた気がする……）」

可憐は、滅也が言わなかったが大体把握できた。

滅也達は、あのストーカー女の行動を忘れる為に屋敷を後にした。

滅也と一緒に街を歩いていて「大体……滅也の言った意味が解った

よ……」滅也も無言で頷いた。

街を見渡すとファンガイヤと妖怪そして人間が仲良く共存していた。

「私たちの使命……私たちの世界を救う為には、無数の世界を旅しなければならぬ」

可憐がそれを言うと滅也が彼女に振り向いた。

「けど、妖怪とファンガイヤそして人間が仲良くしている世界で倒す敵は何だ？」

滅也が疑問に成っていると可憐が何かの音に気付いた。

「ん？どうした可憐。」

滅也が聞いていると壊れたバイオリンの音が響いてきた。

「可憐……少し用事を思い出した付いて来てくれ。」

滅也は、可憐を連れてまたアノ屋敷に戻った。

二階に月音が壊れたバイオリンの音が響いているがプチン！と弦が切れてしまった。

月音が落ち込んでいると外からバイオリンの音をしている事に気付いた。

月音は、窓を見て滅也の演奏を聴いていた。

そして自然と屋敷の扉を開けて近くで聴いていた。

「聴いていたのか？」

バイオリンを弾くのをやめて滅也は、月音に質問をしていた。

「はい。とても良い演そ・・・はっ!!?」

何故か月音の後ろにみぞれが此方にジーと月音に近寄るなオーラを放っていた。

「み・・・みぞれちゃん・・・」

月音もはっ!と驚きを隠せない。

みぞれが滅也に近寄って来て

「・・・お前・・・月音に近寄るなストーカー・・・」

「それは、オマエジャアアア!!」

滅也の声は、大空に響き渡った。

「それより・・・月音だっけ?お前・・・腕の制御装置のロザリオが壊れかけている。妖怪の臭いが少しするぞ。」

滅也が指を指した方を隠した。

「怖いですか？」

月音は、不安だった。しかし、滅也は、横を振った。

「人間でもファンガイヤでも妖怪だろうと関係ねえ……だから、いい年した男が逃げ回るな。」

月音が何か言おうとした時

キヤーーーーーー!!!

「「「「!?!?」」」」

滅也は、悲鳴が聞こえた方向に向かって走り出した。

悲鳴を出していた所には、ライオンのファンガイヤが人間の女性を追いかけていた。

「た、助けてください!!!」

滅也は、その女性に近寄って助けを求めてきた。

「どこがファンガイヤと人間と妖怪の共存だ!!!」

滅也は、ライオンファンガイヤを睨んで言った。

「そこを退け!!!この女は、掟に背いた。」

滅也は、女性を逃がすとライオンファンガイヤを阻んだ。

滅也は、バックルを腰に付けてカードを挿入した。

「変身!!」

ーカメン・ライド・ディケイド-

ライオンファンガイアは、ディケイドに襲い掛かったがディケイドは蹴り続けてカードケースからカードを挿入した。

ーアタックライド・スラッシュー

ディケイドは、ライオンファンガイアの懐に回りこみ切り刻んだ。

「ぐうぐう・・・キ・・・キサマ何者!？」

「仮面ライダーディケイド」

ディケイドも最後に己の名前を教えるとライオンファンガイアはの体は、ガラスのように砕け散った。

可憐たちも滅也を追い着いたら月音は、その仮面ライダーディケイド言葉に目の色を変えた。

「ディケイドだつて!!?」

月音は、そう言いディケイドの前で立ちはだかった。

月音の傍からキバット・バット3世が出てきた。

「月音こいつキバットラが言っていた奴だよな。」

キバット・バット3世は、月音の片手に持たれると反対の手に噛ませた。

ガブー!!

「変身!!」

月音の腰からベルトが召喚されそのベルトをキバット・バット3世を装着した事によって月音は、仮面ライダーキバに変身した。

その林の影から白ローブがキバーラといた。

「ほら〜ね! 士郎とセイバーを連れて来くればきっとディケイドも現れるって言ったとおりでしょ?」

.....ふふふふ!! ディケイド此処が貴方の墓場です.....

白ローブは、笑っていた。

「お前がキバ.....この世界の仮面ライダーか.....」

ディケイドは、キバに言っていると

「はあ!!」

キバは、とてつもない速さでディケイドに向かって攻撃して来た。
しかし、ディケイドは、次々にかわして行った。

「お前の事は、聞いている悪魔!!」

キバは、ディケイドに睨んだ。

「やれやれ・・・またか!!」

ディケイドに悪魔と言うのは、何処の詐欺師だ?と滅也は思った。

「おいおい・・・人の話を聞け!!」

それでもキバは、ディケイドに攻撃を続ける。

ドン!

仕方なくディケイドは、キバを蹴り飛ばし数メートルまで飛んで行った。

キバも少し興奮している。

「月音!落ち着けて!」

キバットの言葉を無視して腰のフェッスルから緑のを取り出した。

「来い!バツシャー!!」

フェッスルをキバットの口元に押し込むとキバットがフェッスルを

吹き

「バツシャー・マグナム!!!」

そこからキャツスル・ドラんにいたセーラーさんの服を着ていたアモンは、そこから魚人に変身してそれから銃に変形し城からキバの居る場所までワープした。

キバがバツシャー・マグナムを持つと仮面の瞳が緑色に変化して右肩の鎖が解かれた。

そしてキバ・バツシャーフォームに変わった。

キバは、そのままデイケイドに銃撃した。

デイケイドも避けて剣から銃もモードに変形して撃つが相撃ちに成ってしまう。

双方の攻撃が当たり二人は、倒れる。

「イタタタ・・・クソ! 仮は、100倍返しじゃないと気が済まない!!!」

デイケイドは、立ち上がりカードケースからクウガのカードを挿入した。

「変身!!!」

ーカメン・フォームライド・クウガー

ディケイドの姿からDクウガに変身した。

「士郎君と同じクウガに滅也が・・・！」

二人の戦いを見ていた可憐も驚いた。

Dクウガは、そのままキバに格闘戦に持ち込みキバが押されていた。

「ドツカー！！」

キバは、腰から紫のフェッスルを持ちキバットに差し込んだ。

「ドツカー・ハンマー！！」

今度は、紫のハンマーが召喚されキバの緑の色が紫に変化し両肩と腹部が解き放たれ頑丈な鎧となった。

「はあああああ！！」

ぶん！ぶん！ぶん！ぶん！！

キバ・ドツカーフォームは、格闘戦に特化しており速さは、無いが力と防御は、キバのクラスストップである。

ドン！

「グアアアアアアア！！！！」

ハンマーに当てられてDクウガは、高く飛ばされていった。

「クソたれ！！こうなったら！！」

またカードを取り出して挿入した。

「カメン・フォームライド・クウガ・タイタン」

ドン！「くあああああ！！」

タイタンフォームに変形したDクウガは、キバのハンマーを奪い取った。

Dクウガもタイタンフォームは、キバのドッカーフォームと同様だがクウガの方が力がある事を裏付ける。

奪ったドッカー・ハンマーは、タイタンソードに変わった。

「はあ！」

スパ！スパ！スパ！！

Dクウガは、キバを斬り付けた。

「ウワアアアア！！！」

キバは、そのまま階段に転がって行った。

「ギン先・・・いやガルル来い！！！」

キバは、腰から青いフェッスルをキバットに挿入した。

「ガルル・セイバー!!!」

キバットが呼び出した。

「は~~~~・・・目立たないな~~~~・・・ん?」

銀影は、キャツスル・ドランの客の間で一人ポツンと紅茶を飲んでいると召喚の光が出てきた。

「おっしゃーーーー!!! やつと出番やーーーー!!!」

と言い銀影は、何故か床にしゃがんだ。

銀影の目が赤い狼男の目になりそのまま狼男になると狼の形を象った剣になり月音の所まで一直線に向かった。

キバが銀影が化身となって現れたガルル・セイバーを左手に持つと左肩と腹部の鎖が解き放たれた。

キバ・ガルルフォームは、スピード重視の戦いが得意だった。

キバは、そのままDクウガと剣の白兵戦に持ち込んだ。

「何だか面白く成って来たな!!!」

Dクウガは、剣と剣の交わって戦っている最中でも余裕な事を言った。

「は」

ドン！

Dクウガは、キバを蹴りまたカードを挿入した。

ーカメン・フォームライド・クウガ・ドラゴンー

Dクウガは、紫と銀から青に変形し持っていたタイタンソードをドラゴンロットに変形した。

「オレは、人間の女を守っただけだ。」

Dクウガが説得しようとするが、「だ……黙れエエエエエエ！！！！」

キン！

ガルル・セイバーとドラゴンロットの戦闘に成ろうとした時「だめええええ月音ええええええ！！！！」

「！！！！！！」

攻撃の間に桃髪の女性が割り込んで来た。

「も……萌香さああああんん！！！！」

キバは、剣を退けて右手で庇おうとしたら……

スル！

「え……あああああ!!!」

キバは、足がすべりそのまま萌香の首にネックレスに成っている口ザリオをはずしてしまった。

キイイーン!!

萌香の体が赤く光り蝙蝠達が集まって萌香を包んだ。

「つ……月音……これヤバイんじゃないか……モカ……?」

キバットがキバに変身している月音に恐る恐る言った。

蝙蝠達が居なくなると空は赤く染まり萌香の桃色の髪が銀色の髪に変化して行き目も鋭さを増していた。

*胸の口ザリオの封印が解かれるとき萌香に隠されたバンパイアの人格が目覚める。

「月音……王の継承を逃げるとは、一体どう言っつもりだ!!!」

萌香（裏萌香）は、仁王構えでキバ……いや月音に殺気を籠った目で見下ろしてした。

「い……いや!!!……萌香さん……これは……その……」言い訳はいい!!!」「……ひ!」

キバは、正座されて裏萌香にごめんなさい姿勢で叱られていると

「月音・・・それはともかく・・・」

ギロ！

裏萌香は、Dクウガに向かって走り出した。

「たあああー!!」

ドオン!!

「& ' % \$ # (& ! ” \$ % & ” “ * + ? ~ ~ ~ ~ ~ !!」

Dクウガは、裏萌香の蹴りをされ言葉では、理解できない言葉で地面に転がり変身が解除された。

ドス！ドス！ドス！

裏萌香は、そのまま滅也に進み胸倉を掴んだ。

「きさま・・・私の所有物に手を出すとはいい度胸だな・・・」

裏萌香のさっきの蹴りで意識を無くしてしまった。

「ふん！軟弱な奴め!!」

止めの正拳を出そうとした時・・・

「「待つてくださーい!!」!!」

裏萌香は、隣から二人の男女が来た。

「ん？何だ下僕A下僕B。」

裏萌香は、そのまま滅也をゆっくり地面に下ろした。

「すみませんコイツは、俺達の知り合いなんです。どうか勘弁してくださいー！」

男女は、裏萌香にペコペコした。

「ふん！感謝するんだな下僕Aと下僕Bに。」

男女は、裏萌香をなだめて落ち着かせた。

「（ん？？この声何処かで聞いた事ある声けど・・・ってアレ！！？？）」

可憐は、滅也が気絶して真っ白になっている事に気付いた。

可憐は、どうやら隣の銀髪の女性に制裁されたのだと第6感が悟っていた。

「って士郎君！？セイバーさん！？」

銀髪の女性の隣に前の世界の二人がいた。

「あああ・・・可憐！可憐じゃないか（ですか）！！」

二人も可憐に駆け寄って来た。

「どうして二人がキバの世界に？」

可憐は、不思議そうに質問して来た。

「・・・ん？痛たつたつたつあああああ・・・」

滅也がようやく起きた。

すると左隣に可憐が右隣にセイバーと士郎が立っていた。

「起きたか滅也？」

士郎とセイバーがまた会ったな顔をしていた。

「ん・・・って何でお前らがいるんだ・・・ん？」

誰が濡れたタオルを滅也に渡す。

滅也が前を見ると裏萌香とばかり驚いていると「あの・・・大丈夫ですか？」

さっきの桃髪の女性だった。

「はっ！す・・・すいませんでした！！」

滅也は、その女性を見て士郎の後ろに行き土下座していた。

「あ・・・あの・・・そんなにかしこまないでください。此方こそもう一人の私が失礼な事をしてしまつてすいませんでした。」

しかし桃色の髪の女性：赤夜萌香は、逆に謝ってきた。

「けど、どうしてお前達がこの世界に居るんだよ？」

滅也は、萌香に動揺しながら士郎とセイバーに聞いた。

「まあ色々あつてな！」

「我らが王子、月音王子」

そう言いながら士郎とセイバーは、月音の前で跪いた。

「おい！どう言う事だ！？」

滅也が質問してきた。

「ああ、俺達は、この世界に来てこの世界の平和の為に陽海親衛隊に入ったんだ。」

士郎は、嘘の欠片も無い言葉で答えた。

「私は、シロウと一緒になら何処までも。」

セイバーは、結局士郎について行くらしい。

「だが、オレは、人間の女を守つ「それは違う。」

滅也が質問する間に別の声が外の階段方面から聞こえた。

スワローテイルファンガイヤがさっきの女性の髪を持ち上げていた。

「はなせ！はなせ！！」

女性は、さつきとは別に興奮していた。

「あのファンガイヤは、掟に背き人間を襲う妖怪とグルに成ってラ
イフエナジーを食らい何人の犠牲に成った人間も出るぐらいだ。」

滅也に女性の事情を言いながら士郎は、その女性を睨んでいた。

「何が悪い！！これが、ファンガイヤや妖怪の本能だ！！それを抑
えて生きていられるか！？私だけじゃない！！他にも苦しんでいる
奴らが沢山いるんだ！！」

ドン！ バリイイイインン！！

女性は、スワローテールファンガイヤに蹴られてガラスの様に砕け
散った。

それを見た萌香と月音は、目を瞑った。

「だから俺達が悪いファンガイヤや妖怪を退治しているって訳だ。」

士郎の説明を理解した滅也は、一応海妙寺家に行く事になった。無
論、萌香や月音は、ニッコリと微笑んで「少しは、息抜きをしてき
なよ士郎にセイバー。」と許可を貰い可憐の家に行く事になった。

「ただいま！」

可憐が家を開けると玄関からチョコレート甘い香りがして来た。

「おお！おかえり可憐！滅也くん。つてあれ！？君達は！？」

秀作もこの前の運ばれた太郎とセイバーに気付いた。

すると……

「がちゃ！がちゃ！ぴゅ〜！カタン！コトン！！」

秀作が何やら甘い香りのする物を急いで茶の間に運んだ。

「さあさあ！今日は、ワシの手作りのチョココレート・フォンディッシュだ！遠慮しないで君達もさあ！」

秀作は、手招きで太郎とセイバーを誘った。

「パク！」

「シ……太郎！！これは、美味しいです！！幸せです！！」

セイバーは、目を丸く頬を真っ赤にさせて太郎に言ったが……

「セイバー！少しは、遠慮しろよ！人様の家何だか……！！」

太郎は、セイバーに注意するがその奥から秀作がジーンと太郎を睨む。

「美味しくないの！？」

秀作は、シヨンボリな顔をしている。

「いいえ！美味しいですよ！！パクパク！！」

士郎は、口に沢山の果物を頬の中に収めていった。

「そうだろ！バレンタインに貰ったチョコの再利用だよ。」

秀作は、笑いながら台所に戻って行った。

「いっいつ貰っていたんだよチョコ！！！」

滅也は、秀作に突っ込んだ。

「っで、どうしてこの世界にお前らが居るんだ？」

滅也もセイバーの隣からチョコレート・フォンディッシュを食べながら士郎に聞いた。

「ああ、俺もよく分からないが家に帰ろうとしたら白い蝙蝠がやって来てこの世界に行き成り来ていたんだ。」

士郎も自分達が来てしまったのを詳しく分からなかった。

「ねえ。士郎さんにセイバーちゃんだっけ？よかったら家に泊まっていって？」

秀作が二人に聞いて来た。

「けど、他所者の俺達は……えっ残念だ……まだ仕込んである料理もあるのに……」

ピキーン!!

セイバーは、秀作の言葉に目が光った。

「シ・・・シロウ!!泊まって行きましょう!!」

セイバーが士郎に頼んだ。

士郎は、困り果てていると滅也が目で泊まって行けよっと言つ目で可憐も一緒の目で頼んでいた。

「・・・仕方ないか・・・一泊だけだぞセイバー。」

士郎がその言葉を言うとセイバーは、天国に行ったかのように笑顔になつた。

一方町の裏路地では・・・

3話：「本能」（後書き）

次回仮面ライダーディケイド

「お前のクウガのベルトを貰う。」 「ファンガイヤは、人間のライフェナジーを、妖怪は、人間の血肉を貪り尽くす。」

「お前らと月音は、違う！コイツは、自分の信じた者達の為に戦える。」 「私の下僕に手を出した罪。地獄で償え！！」

「月夜の王と女王」

全てを破壊し、全てを繋げ！！！！

4話：「月夜の王と女王」(前書き)

更新遅れてすいません。オリジナルカードが出てきます。

4話：「月夜の王と女王」

世界の破壊者ディケイド……その目に映るものは何か……

士郎は、セイバーが寝静まった頃を見計らって夜風に当たりに行った。

「見つけた」

士郎が夜風に当たっていると士郎達をこの世界に連れてきた白い蝙蝠がやって来た。

「お前は！？あの時の変な蝙蝠！！？」

士郎が睨んでいると白い蝙蝠が笑っていた。

「ふふふふ……失礼な人ね……私は、キバーラ。キバット族の一人よ。」

そう言いながら士郎んの周りを飛んで説明していた。

「ねえ士郎……何で滅也が世界の破壊者何って言われるか存在知りたくない？」

士郎は、最初にディケイドが悪魔だとベルトに聞いていたがまったく違っていた。

「……どう言う意味だ！」

すると周りの景色がキバの世界に来た時と同じ様に周り始めた。

「信じないかも知れないけど滅びて子このキバの世界を破壊しに来た。」

やがてキバラーが居なくなると景色が夜道から昼間の球場の観席に立っていた。

ドン・・・ドン・・・

士郎は、上の観客席に見たこと無い仮面ライダーがいた。

仮面ライダーは、黄色いラインが入っていて腰に銃だか剣だかの武器があり紫の仮面を付けていた。

ガチャ！

ライダーは、腰の武器を取り構えていた。

「お前のクウガのベルトを貰う。」

士郎は、ライダーが冗談でしていないと直感で悟った。

「嫌だ・・・っと言っただら？」

士郎は、冷や汗を流しながら言った。

ピュン！

ライダーは、武器を士郎に向かって撃ち放った。

士郎は、咄嗟にかわした。

「力付くでも貰う！」

ライダーは、隙の無い構えで構えていた。

「なるほど・・・仕方ないか・・・」

士郎は、腰にベルトを出して構えた。

「変身！」

士郎は、クウガになり構えた。

「トレース・オン投影開始！！」

クウガは、銃に似た形を具現化した。

「超変身！！」

ピュンピュン！！

クウガは、ペガサスフォームに変わってライダーにペガサスボウガンを撃ち返した。

そしてライダーとの銃撃戦でライダーがジャンプして接近して懐に狙おうとしたが・・・

カシャ！

クウガもライダーの懐にペガサスボウガン突きつけていた。

「何で俺を狙うんだ？」

クウガは、構えを解かないで謎のライダーに質問してきた。

「邪魔なんだよ・・お前もディケイドと同じ位危険だからな。俺の思う通りにならなくて！」

クウガは、ライダーの言っている意味が理解できずに撃とうとしたがライダーの方がバツク・ステップでかわして武器から剣の刃が出た。

「はあ！」

ガチン！

クウガは、ペガサスボウガンでガードしていた。

「超変身!!！」

クウガは、ペガサスフォームからタイタンフォームに変わるとペガサスボウガンだったのがタイタンソードに変化した。

「はあああああ!!！」

ガチン!!

クウガが剣で攻めに入った。

ライダーもクウガの隙の在る所に横に切り刻んだが……

キイイイン!!

「な……!?!」

ライダーは、クウガのタイタンフォームの能力を理解していなかった。

クウガのタイタンフォームは、速さは失うが力と防御を誇っていた。

ドン!

「グアアアアア!!」

ライダーは、クウガに力一杯の蹴りで数メートル飛ばされた。

「ぐうううう……まさかこの程度の奴に押されるとは!?!」

ライダーも体がやっと動く状態だった。

「はあ!……ん?」

クウガもタイタンソードで斬り付けようとしたが景色が変わってきた。

「今日は、こんな所かな……覚いとけ俺の名は、仮面ライダーカイザだ。」

カイザは、そう言うと消えてしまった。

クウガも景色が変わり最初に居た夜道に戻っていた。

．．．．ふふふふふ．．．．

笑い声がしてクウガが振り向くと白いローブの人が立っていた。

「こ．．この声は．．まさか!？」

クウガは、その声に思い出した。

それは、士郎が最初にクウガのベルトを付けた時に聞こえたベルトの声そのものだった。

．．．．クウガよ何故仮面ライダー達を倒すディケイドに居る?．．．
．．．

白ローブは、クウガに質問していた。

「お前の言っている言葉は、信用できない!!」

クウガは、滅也がそんな悪魔に見えなかった。

．．．．いずれ解ります．．．．

白ローブは、消えてしまった。

クウガは、変身を解いて何故クウガのベルトに白ローブの声だったのか一番の謎になっていた。

ガチャアアアンン！！

月音と陽海親衛隊の住んでいるキャッスル・ドランの廊下で花瓶の割れる音が響く。

「きゃあああああ！！！！」

ボウ！

廊下にいたメイドは、九曜の火によって灰に成ってしまった。

「何事や！！」

月音達、陽海親衛隊のメンバーが廊下に向かうと其処には……

「ひ……酷い……」

萌香がそう言ったのは、廊下に沢山の妖怪や人間の死体の山があった。

「久しぶりだな……陽海親衛隊の諸君……いや元陽海学園の新聞部諸君。」

死体の山から出てきたのは、九曜率いる過激派テロ集団であった。

「九曜！！お前また陽海学園に居た時と同じアホなマネをしおったな！！！」

銀影が九曜に睨みつけていてもまったく動じずにいた。

「九曜さん！一体これは、どう言う事ですか！？」

萌香達の後ろにいた月音が前に出て九曜と対面した。

「おやおや、これは、ヒーロー気取りの青野月音じゃないか？」

九曜は、平常心のまま挑発してきた。

「王の継承は、この私九曜が貰う！！」

九曜は、睨みつけると九曜の後ろから陽海学園の元公安委員会の妖怪やファンガイヤが襲い掛かった。

「ギン退け！」

キイイイイン！！

銀影の隣にいたフランケンシュタインのリッキーが紫のフランケンシュタインに成って月音達を襲い掛かる九曜の部下達の攻撃を弾いた。

「ふう！！」

バコン！！

一瞬でリッキーが大半の九曜の部下達を殴り払った。

「はああああ！！！！」

銀影もウルフェンに変身して残りの敵に得意のスピード攻撃で戦う。

「アモン先輩！紫！みぞれ！萌香！あたし達も行くわよ！！」

「「「おう！！」」」

胡夢達が銀影の攻撃している所に加勢しに行く。

「はあ！」

九曜が手刀で月音に向かって攻撃した。

「キバット！！行くよ！！」

月音は、ジャンプしてキバット・バット3世を呼んだ。

「キバって行こうぜ月音！！ガブリ！！」

キバットが月音の手に噛んでベルトが出てきた。

「変身！！」

月音は、キバに変身した。

「はああ！！」

九曜も己の姿でもある九尾の狐（最終形態）に変わった。

「とわー」

「ぶっ！！」

九曜の部下達が九曜の座る玉座の前でお辞儀した。

「では、王の最初の2つの命令を伝える!!」

九曜も勝ち誇り陽海親衛隊の者達を見た。

「これより、掟を廃止する。人間との共存を求めるファンガイヤや妖怪を処罰する。無論逆らう者全てのファンガイヤや妖怪もだ!!」

「何やって!!」「そんな理不尽ですう!!」「冗談じゃないわよ!!」「いらいらする・・・」「・・・不愉快」「メチャクチャだよ!!」「そ・・・そんな・・・」

陽海親衛隊は、納得がいかなかった。

「ファンガイヤは、人間のライフエナジーを、妖怪は、人間の血肉を貪り尽くす。」

九曜の最後の命令で銀影達が九曜に飛び掛った。

「この王の力を見せてやるか・・・はあ!」

九曜が王の証のエンブレム光り輝き銀影達に向かって当てた。

「くくくくあああ!!」「くくく」

胡夢、リッキー、アモン、紫、みぞれが銅像になった。

しかし、変身の解けた銀影と萌香は、少し火傷程度の傷で済んでい

た。

「うっ……アモン！！リッキー！！！」

銀影が同じアームズモンスターの名前を呼ぶが反応がない。

「胡夢ちゃん！紫ちゃん！みぞれちゃん！！！」

萌香も同様に呼んだが銀影と同じらしく反応が彼女達にもない。

「なるほど……大妖には、この力は効かないのか……」

九曜の部下達が月音に襲おうとしたが銀影がウルフェンに変身して萌香の元まで連れ戻した。

「萌香！！はよう行け！！月音を連れて逃げろ！！！」

銀影は、足をピクピク痙攣しながら萌香に言った。

「ギン先輩！！けど……」はよう行け！！月音は、この世界の救世主なんや！！！」

銀影は、萌香に怒鳴りながら時間稼ぎをするつもりだった。

「すみません！！！」

ガタン！

萌香は、月音を抱えて逃げた。

「やれやれ・・・面倒かける後輩持つと苦労すんわ〜・・・さてっと
！」

びゅー！ポコポコポコ！！！

「ここを通りたかったら俺を倒してから行け！！」

それを追って来る九曜の部下の前に銀影が通さなかった。

「キサマ・・・王に逆らうのか？」

九曜の部下の女郎蜘蛛の蛭糸が威嚇してきた。

「王・・・やと？クツクツクツクツクツクツ・・・はっはっはっはっはっはっはっ！！！！」

銀影が蛭糸達に笑った。

「王は・・・月音や！！！！」

そう言うと銀影は、蛭糸達に攻撃を始めてきた。

・・・俺やリッキー、アモン・・・そう俺達は、月音達に
会っていなかったらきつとシケタ面の野郎に成っていたかもしれへ
んな・・・

その頃の新聞部は、九曜達の公安委員会によって活動停止にまで追

いやられていた。

しかし、あいつ等が未来も何も希望も無かったのに光を付けてくれた。

……ありがとっな……

銀影は、周りの九曜の部下達に囲まれて半殺しの目に会って意識が消えていった。

「きゃあああああ!!」

萌香が月音を連れてキャッスル・ドランの外に繋がる扉に辿り着くと扉に九曜の部下が襲い掛かった。

「はあああ!!」

パラパラ!!

「『オウウウウウウ!!』」

萌香は、後ろから九曜の部下達が次々に倒れていくのに気付き振り向くとビジョップのスワローテールファンガイヤと他のファンガイヤ達がいた。

「ビ・・ビジョップさん達!!?」

萌香は、彼らを見ると彼らも全身がボロボロの状態だった。

「はぁ……はぁ……大丈夫ですか!? 萌香様? 月音様は……」

「？」

スワローテールファンガイヤは、何とか喋っていた。

「ど……どうしたの！！？その傷！？」

萌香は、彼らの傷の心配をしていた。

「それよりも……お早く！！……はっ！！！」

ビジョップは、奥を見ると蛍糸達がいた。

「ここに居たのね。」

彼女は、ワザ笑っていた。

「萌香様。此処は、ワタクシ達が食い止めます。逃げてください……」

スワローテールファンガイヤ達は、萌香と月音の壁に成る様に守っていた。

「待っていてね！今から土郎くんやセイバーちゃんを呼んでくるから持ちこたえていて！！！」

タタタタタ！！！！

萌香は、振り向かず月音を肩に乗せて走っていった。

「(すみません。萌香様……いえクイーン……ワタクシ達の代

「ぐぐぐぐぐ!!」

スワローテールファンガイヤは、腹部に大きな穴が蛍系の硬質した糸で貫かれた。

「ま・・まだだあああああああ!!」

ガジ!!

スワローテールファンガイヤは、蛍系に離れない様に強く抱きしめた。

「キサマ・・!!まさか!!?」

蛍系は、気付いた。このファンガイヤが残りの自分のエネルギーを使って大爆発する事に。

「や・・やめろ!!ええい!!クソ!!」

蛍系が振り解こうとしてもスワローテールファンガイヤは、決して離すことも無く更に強く締め付けた。

・・・・・さよなら我が主、クイーン・・・・・

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!

「も・・・萌香・・・さん・・・？」

萌香の声に月音が気付いた。

「っ、月音！気付いたの？」

萌香は、涙を拭いて月音を起こした。

「そうか・・・負けたんだね・・・」

月音は、愕然とした。

「それよりも滅也君達に応援を呼ば「僕は、王に成らない・・・」え・・・？」

萌香が希望の言葉を言い終わるよりも先に絶望の言葉を月音は言ってきた。

「どつ言つこと月音!？」

萌香が月音に訊ねると月音の様子が変だった。

「もう・・・駄目だ・・・に・・・逃げて萌香さん・・・」

ビキビキ!!

月音の顔がファンガイヤの変身する時のアザが浮かび上がった。

「・・・!!?!?もしかして月音・・・あの時のが!!?!?・・・」

何故月音が仮面ライダーキバに変身できるようになったか？は、もう2年前になる。まだ高校生だった月音は、人間だと九曜にばれて地下室に監禁された。

萌香達が助けに入った時に九曜の炎に体の半分以上を火傷に追いやられて死にそうになった。

しかし、萌香のもう一人の人格が新たなキバに選ぶ唯一の能力を権利を持っていた。

それにより九曜に逆転の勝利になった。

だが、それは、大きな代償を背負う事に月音は、成ってしまった・・・
・・人間がキバに成ればファンガイヤに成ると言う代償であった。

それによりファンガイヤに成りそうだった月音は、陽海学園の校長の手によって封印に成功した。だが、それを外れるか壊れた時は、ファンガイヤに成ってしまうモノだった。

グサ！！

萌香の首筋にファンガイヤがライフエナジーを吸う牙が刺されていた。

「ああああ！！・・・ご・・・め・・・ん・・・ね・・・月音・・・を・・・

こんなのに・・・したのは私だから・・・好きだけ・・・吸つてい
い・・・よ・・・」

萌香は、涙を流しながら月音に謝った。

・・・誰か!!萌香を・・・萌香さんを助けて!!・・・

月音は、自分の本能をコントロール出来ずに助けを心の声で言っ
ていた。

ーアタックライド・スラッシュー

ドン!!

突然、電子音の音が響き月音は、何かに頭を殴られて気絶した。

「おゝい。大丈夫か？」

牙が抜けた事で地面に膝を下ろす萌香に仮面ライダーディケイドが
心配していた。

「め・・・滅也くん・・・なんで此処に？」

萌香がそう言うのとディケイドは、変身を解いた。

「ああ、家にいたら突然キャッスル・ドランの方から爆音がして来
たら行き成り月音が萌香を襲っていたから流れて的にな。そんな事
より今は、可憐の家で事情を聞かせてくれ。」

滅也が腰が抜けた萌香に手を貸して背中に月音を乗せて可憐の家に

向かった。

「月音君が萌香ちゃんを襲った!？」

可憐は、滅也が傷ついた月音を背中に乗せ萌香も片方の肩で杖代わりにして最初は、驚いた可憐は、家にいたセイバーと秀作を夜中なのにあたき起こして二人を看病してようやく可憐は、滅也から訳を聞いていた。

「滅也君。妖怪って夜食食べるの？」

と秀作は、月音と萌香を見てセイバーと共に料理の準備を何時でもOKな感じでした。

「食べるだろ？人間の心を持って居ればな・・・」

滅也も原作のロザリオとバンパイアを最新刊まで読んだがここまで複雑に想像通りなのに戸惑っていた。

「ああ、わかったよ。じゃあセイバーちゃん手伝って。」

「はい。シュウサク。」

スタスタ「入りません。僕は・・・」

秀作は、台所に向かう時月音の声が聞こえてセイバーと共に止まっ

た。

「それで、空腹になり萌香を襲ったのか？」

滅也は、布団で寝ている月音に問いかけた。

「ち・・違う・・・僕は・・・」お前は、ファンガイヤに成ろうと
している自分がいる。そしてお前の中のファンガイヤの人格がライ
フエナジーを求めていた。」

滅也は、月音の言いたい気持ちを自分の言いたい事を言っただけだ。

「ええ・・僕は、怖かった。この人格が目覚めた日からその人達と
仲良くなりたいたいと思うたびに自分の中の人格がその人の魂・・・ラ
イフエナジーを求めている自分がいる事に怖かった・・・だから王
に成ってはいけないと感じたんだ。」

月音は、何故王の継承を迷っていたのかは、人を襲ってしまうので
はないかと言う迷っていたからである。

「人と妖怪とファンガイヤの共存なんて嘘だ。こんな醜い僕が証拠
だ!！」

月音は、声を上げた。

「だから一人で孤独に誰とも関わる事無く生きていくのか？誰も好
きに成らず誰も信じずにか？」

滅也は、月音が本当に孤独を好きなのか疑問で仕方ない。

「僕は、誰も襲いたくない」だが萌香を襲った。萌香の事が愛しているんじゃないのか？」

滅也がそう言うのと可憐やセイバー、そして玄関から帰って来て開ける土郎にも聞こえていた。

「でも、今度僕の中にいるファンガイアの人格が目覚めたら完全な怪物に成ってしまう・・・」

月音は、険しい表情で滅也に言った。

「安心しろ。その時は、オレが倒す！！オレは、破壊者だ。悪魔だからな！！」

可憐は、滅也が今までに無い悲しい顔に見えた。

すたすた・・・

「滅也何処に？」

可憐が家から出て行く滅也に聞いた。

「なに。ちよつと散歩だ。」

ガチャ！「！！！？お前ら！？」

滅也が玄関のドアを開けたらセイバーと土郎もいた。

「何処に行く気だ滅也。」

「ああ散歩に。」

「じゃあ俺達も行くかセイバー。」

「はい、士郎。」

滅也の後に士郎とセイバーが付いてきた。

キャッスル・ドランの王座の間では、王に成った九曜が座りそして座っている者の視界の方には、鎖で縛られて吊らされている銀影が全身傷だらけで顔には、拷問で付いた痣が沢山あった。

タッタッタッタツ・・・

「銀影・・・もう降伏したらどうだ？もう刃向かう者はお前しか居ないんだぞ？」

九曜は、吊らされている銀影に近寄った。

ガシ！

「どうなんだ！？」

九曜は、銀影の髪を掴んで聞いてきた。

ペッ！

銀影は、九曜の顔に唾を吐いた。

「ふっ……しつこい男は、モテへんぞ九曜……王は……月音
や……」

ドカ！

「グア！」

九曜は、銀影の腹部に蹴りを入れた。

「そうか……なら死ぬ！！……ん？」

九曜は、止めを刺そうとした時、王の間からバイオリンの音が響いていた。

ギイイイ

王の間の扉から二人の男と女がいた。

バイオリンを持っていた滅也が止まり九曜を睨んだ。

「人間め・・・私の同志達を殺した報いこの九曜が晴らす！王として
粛清する！」

九曜が妖怪態に変わる。

滅也もバツクルを腰に付けてカードケースからカードを取り出す。

「変身！！！」

ーカメン・ライド・ディケイドー

士郎もベルトを出して構えた。

「変身！！！」

士郎は、クウガに変身してセイバーもエクスカリバーを出して構えていた。

「かかれえ！！！」

九曜が言うその後ろから残党の妖怪とファンガイヤが数人出てきた。

「たあ！」

「はあ！」

ディケイドの目の前をクウガとセイバーが先に行く。

「滅也！此処は、俺とセイバーに任せてお前は、アノ狐を頼んだぞ

！」

「ああ！わかった！」

デイケイドは、九曜の元に向かった。

「テメエが新しい王か・・・」

「アタックライド・スラツシュー」

「何故クーデターを起こした狐？」

デイケイドは、剣を持ちながら剣を九曜に向けた。

「くだらない掟などを壊す為だ。人間とファンガイヤ、そして妖怪とは、共存など虫唾が走る！」

九曜は、デイケイドに襲い掛かった。

デイケイドも剣で盾にして押されない様になっている。

九曜もデイケイドの剣を両手で押さえていた。

九曜とデイケイドは、どちらも譲らない状況で横に移動していた。

パライイン！！

そして窓から二人は、落ちた。

二人は、無事に着地してまた闘いを続けていた。

「人間！お前も信じていないだろ！？この種族達の共存など！」

ドン！

「グア！」

九曜は、ディケイドに蹴られて数メートル後ろに跳んだ。

「馬鹿か！？オレにとって人間も妖怪もファンガイヤも変わらない！倒す者は、倒すそれだけだあ！」

「馬鹿は・・・お前だ！」

九曜は、狐火でディケイドに攻撃したがディケイドは、上手くかわした。

「なら！！はああああ！！！！」

九曜の妖怪態の体が変化していた。

「な、何！？」

ディケイドは、九曜から今までに無い強大な力を感じていた。

九曜の体が鎧の様に覆われていた。

「はっはっはっ！！これが九曜の最終形態だ！滅多な事では、見る事は出来ん物だぞ！？」

九曜の姿は、ファンガイヤに近い物だった。

「はあ!！」

九曜は、比喩物にならない狐火を出してきた。

「ぐああああ!！」

デイケイドは、押されてそのまま広間に落とされた。

「大丈夫ですかギンさん？」

セイバーと土郎は、傷つきながらやっと残党を片付けて銀影を担いで広間にいた。

ギイイイ

「「ギン先輩!！」」

扉から萌香と月音が現れた。

「モカ・・・ツクネ・・・」

銀影の目にやっと二人が見えていた。

ダーン！！

「コッコッ！？」「」「」

広間にいた月音達は、音のする方に向くとディケイドが九曜と戦っていた。

「ぐああ！！」

「はあ！！」

しかし状況は、あまり良くないものだった。

「に・・げ・・ろ・・ツクネ・・モカ・・コイツは、俺らには、敵わん・・」

九曜がこつちに気付き向かった。

ザッ！

月音が九曜と対面していた。

ビキビキ

月音の顔からファンガイアの証が現れた。

「たああ！！」

月音は、九曜目掛けて突っ込んだ。

ドン！！

「グブ！！」

月音は、九曜にハイキックされて萌香達の方に飛ばされた。

「月音ええ！！」

萌香は、月音に駆け寄った。

「月音！しっかりして！！月音！！！！」

萌香は、懸命に呼んだ。

カッカカッ

九曜は、萌香に寄って来た。

「最後のチャンスだ！この男を殺せ！！」

しかし萌香は、睨んでいた。

「嫌よ！アンタみたいな奴の命令なんて聞かない！」

ドン！

「きゃあ！」

九曜は、萌香の頭に蹴って月音と一緒に飛ばされた。

「も・・・萌香さん・・・」

月音は、萌香の顔を見た。

「なあに？月音？」

二人は、見つめ合っていた。

「これが最後かもしれないから愛しているよ萌香さん・・・そして信じてくれてありがとう・・・」

月音は、萌香に告白をした。

「な・・・何だこれは！？」

九曜には、この二人の絆が理解できなかった。

「コイツは信じている。人間とファンガイヤと妖怪は共存できると信じている！！」

デイケイドは、立ち上がった。

「お・・・愚かな・・・共存などただの幻想だ！！」

九曜は、同様していた。

「月音・・・もう答えは、決まっただろ？」

デイケイドは、月音に聞いた。

「ぼ・・僕は、王になりたい!!」

月音は、デイケイドを見て言った。

「お前は、諦めた・・自分の弱さに負けて掟を否定した!」

デイケイドは、九曜に指で指した。

「お前らと月音は、違う!コイツは、自分の信じた者達の為に戦える。」

「滅也くん・・」

萌香が目が潤んでいるとロザリオが何が引っかかっている。

それは、月音の手であった。

退かした時・・・

キイイインンン!!!

ロザリオが外れた。

「「「え!?!」」」

セイバー、士郎、銀影は、啞然とした。

ロザリオから妖しい光が出て裏萌香に変わった。

裏萌香は、ディケイドを見ている。

「おい！クラッシャー・・・今回は、加勢してやる感謝しろ！」

裏萌香は、九曜を睨んだ。

「私の下僕に手を出した罪。地獄で償え！！」

すると・・・

「行くぜ月音！！」

キバットが月音に寄って来た。

「うん！行くよ！」

ガシ！キバットを片手で持った。

「キバって行こうぜ月音！！ガブリ！！」

キバットを噛ませると腰からベルトが現れた。

「変身！！」

月音は、仮面ライダーキバに変身した。

「ハッ！」

キバは、九曜に目掛けて空中飛び膝蹴りをした。

「ふ！遅い！ハアツ！」

九曜は、キバの攻撃をかわして狐火した。

ドン！

「グウ！」

九曜の攻撃の最中に背中に蹴りが当たった。

「何処を見ている！？相手は、月音だけじゃなく私達もいるんだぞ！」

九曜は、攻撃がこの三人のコンビネーションで出来なくなっていた。

「クソ！仕方ない！はあ！」

九曜は、ジャンプして外に出た。

三人は、九曜を追って外に出ると九曜は、キャッスル・ドランにいた。

「アノ狐！キャッスル・ドランを奪う気だ！！！」

裏萌香がキャッスル・ドランを奪われたら状況が変わると知っている。

それは、元々萌香の家に代々キャッスル・ドランやキバットは、仕えてきたので理解していた。

「キャッスル・ドラゴンよ．．．我に力を！！」

九曜は、強大な魔力でキャッスル・ドラゴンの力を目覚めさせようとしていた。

「どうするんだ？」

デイケイドは、裏萌香とキバに聞いた。

「そんなの決まっています（いる）．．．僕（私）は．．．」

「王と！」

「女王なのだから！！」

二人がそう言うのとカードケースからキバのカードとまた新しいカードが一枚出てきた。

そのカードは、モカ：クイーンオブバンパイヤと書かれてある。

「そんじゃあ．．．やるか！！」

デイケイドは、カードをバックルに挿入した。

「ファイナルフォームライド・キ・キ・キ・キバ」

「月音ちよつとくすぐりたいぞ！」

デイケイドは、キバの後ろにいた。

「え!？」

キバも今だわからないが何か手があると悟った。

デイケイドがキバの後ろに手を刺すとキバは、キバ・キバットアローに変形した。

カシャ! ギイイ!

デイケイドは、そのままキバ・キバットアローを持って矢の辺りを強く引き九曜に向かって狙いを定めた。

「キバって行くぜ!!」

ピキイイイン!!

キバ・キバットアローがそう言つと弓が放たれた。

ドウカ!!

「があああ!!」

九曜は、キャッスル・ドランに乗りそうな所を見事に命中して落ちて行く。

デイケイドは、カードを挿入した。

ーファナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイ・デイケイドー

ーファンルアタックライド・ク・ク・ク・クイーンオブバンパイヤー

「ウェイク・アップ！」

キバは、ファイルアタックライド形態から元に戻り裏萌香と共に構えていた。

デイケイドは、自分のファイルアタックライドのカードを挿入したら目の前に自分のカードが無数に出て来た。

「ハアッ！」

デイケイドは、そのままカードに飛び込み一枚一枚通過する度に加速や威力を増して行った。

「ハアア！」

キバも裏萌香もデイケイドの隣でダブルキックした。

「グアアア！！！」

落ちてきた九曜の方に三人は、同時攻撃を放った。

ドカアアアアン！！

九曜は、爆発した。

デイケイドは、変身を解いた。

キバも変身を解き裏萌香も普段の萌香に戻った。

「僕は、戦います。運命に負けない様にみんなや萌香さんが信じてくれる人々の為に戦います。」

月音は、滅也と萌香に言った。

「月音…」

萌香は、今の月音が頼れて見えた。

すると月音の左手の甲に王の証が浮かび上がった。

「どうやら王の証は、月音を王と認めたらしいな…」

滅也は、月音に感心していた。

キーン！

「あれ？」

「ここは、何処ですう？」

「確か僕たちつて？」

キャッスル・ドランの中の銅像になった陽海親衛隊は、月音の王の証でみんな元に戻った。

「やあ！」

月音は、銅像になっていた陽海親衛隊のみんなに笑顔で答えた。

「「「「「月音!」「「「「」

みんなも月音がいる事に驚いた。

「みんな心配かけてごめん。僕は、まだ未熟だけど王として頑張るよ!」

みんなは、月音が王になると聞いて喜びの音が響き渡った。

「ありがとうございます。貴方達のおかげで僕達は、今以上の絆を作れる事が出来ました。」

月音達陽海親衛隊は、滅也達にお礼を言った。

「いいや!これは、お前がみんなを信じたからだ。オレ達は、手助けしただけだ。」

滅也は、そう言い口調だが心の中では、喜んでいた。

「土郎くんやセイバーちゃんも滅也くんと一緒に行くの?」

萌香が寂しい表情になる。

「ああ、多分俺も滅也と旅を試してみたくなっただ。滅也の世界と

俺達の世界を救う旅を。」

「私は、シロウが行くなら何処でも」

士郎とセイバーの答えは、決まっていた。

「じゃあね！」

「また来てください！」

「今度は、歓迎するで！」

「またですう〜！」

陽海親衛隊は、滅也達をキャッスル・ドラムから見送った。

海妙寺家では、可憐と秀作が待っていた。

「此処での役割は、終わったの？」

可憐が滅也に聞いた。

「ああ、そんじゃあ次の世界に行くとするか…」

すると絵巻が変わった。

天使達と赤い龍が四聖獣と戦っている絵だった。

「天使のしっぽが混じっているらしいな。」

4話：「月夜の王と女王」（後書き）

次回仮面ライダーディケイド

「可憐が殺人容疑だって!？」「仮面ライダーで裁判?」「僕は、睦吾郎。」「オレは、可憐の弁護士の大空滅也だ。」「オレも混ぜてもらおうか?」

〔バトル裁判! 龍騎〕

全てを破壊し、全てを繋げ!!!

5話：〔バトル裁判！龍騎〕（前書き）

この作品オリジナルライダーを紹介します。

仮面ライダーアポロン

仮面ライダートリトン

仮面ライダー?????

仮面ライダー?????

詳しくは、この話で解ります。

5話：〔バトル裁判！龍騎〕

世界の破壊者デイケイド……その瞳に映るものは何か……

此処は、新聞会社ジャーナル

「海妙寺可憐さんですね。私は、この会社の編集長を勤める秋山ナツキです。電話で貴女が知っている仮面ライダーについての質問でしたね。」

応接室で可憐が編集長のナツキがケーキとお茶を出して仮面ライダーについて伺っている。

「はい！」

可憐は、ナツキの質問に答えた。

「そうですね。うー！」

ナツキは、首筋を抑える。

バタン！

ナツキは、可憐の前で倒れた。

「ええ！？」

可憐は、ナツキが倒れて同様している。

ガタン！

応接室から男が入って来た。

「ナツキ！ナツキ！！」

男は、まだ死んでいないか確認している。

「誰か救急車を！！」

男は、空けてあるドアから人を呼んだ。

「ん！？」

男は、フォークを持っている可憐を見る。

ガシ！

「お前が俺の妻を刺したのか！？」

男は、可憐のフォークを持っている腕を掴んだ。

可憐は、頭を横に振った。

そして外から救急車の音が鳴り響く。

「ナツキさん！」

人々が騒ぐ中を通り越して眼鏡を掛けた青年がタンカーで運ばれるナツキを呼んで近寄った。

「下がって！」

青年は、警察に取り押さえられて道が開ける。

ナツキが運ばれた。

「秋山編集長が殺された？嘘だろ！」

青年は、現場に来る前にアルバイト先の会社で殺された事をアルバイト仲間から聞いて駆けつけた。

「だから私じゃありません！」

「いいから来なさい！」

可憐は、刑事に連行される。

青年は、可憐を連れられる所を見ているとアル男が居る事に気付いた。

「連さん？どうしてこんな所に！？」

青年は、連がこの会社を解雇されたのにこんな場所に居る事に疑問に成った。

「吾郎くん。これは何の騒ぎだ!？」

奥からスタイルが良い二人の男が青年・睦吾郎に聞いて来た。

「副編集長・・・課長・・・はっ!」

吾郎は、連の後を追った。

二人は、吾郎が行ったのを見て応接室にある雑誌『あなたの好きな仮面ライダー』を見て不敵に笑った。

一方：海妙寺家では・・・

「此処が天使のしっぽの世界か・・・ヨッシ！頑張るぞ！」

士郎は、外を見て一人事を言い海妙寺家に入るとセイバーと秀作の
声で響いていた。

「セイバーちゃん！後ろに回りこんで！」

「はい！シュウサク！！！」

『コケ~~~~コツコツ！！』

二人は、鶏を抑捕らえようとしていた。

「セイバー？秀作さん？何をしていますか？」

士郎が秀作に聞く。

「いや~~~~良い地鶏が入ったんだけど途中・・・ウワ！」

『コケ！！』

「ムゲ！」

士郎は、鶏のボディープレスに倒れた。

ガシ！

セイバーが地鶏を捕らえた。

「セイバーちゃん！ナイス！」

セイバーの取り押さえた地鶏を持って二人は、厨房に向かった。

「大丈夫かなアノ二人？」

士郎は、二人が心配に成る。

ガチャ！

別のドアから滅也が現れた。

その姿は、スーツを着て襟にバッチをしていた。

「士郎。可憐が三時間前からこの世界のライダーについて調べている。オレらも行くぞ！」

滅也は、玄関を開けて士郎に言った。

「ああ！」

士郎は、滅也の後を追って外に出る。

「この世界のライダーは、平和に活動しているらしいな。」

滅也は、士郎に雑誌を見せると『あなたの好きな仮面ライダー』を見せた。

「けど、今回の服装は何なんだ！？」

士郎は、滅也に聞いていた。

「これか？この世界に来てから変わった。お前の世界だってそうだったろ？」

滅也が言つと士郎は、最初の滅也の服装が警察。

「けど、滅也？このバッチ弁護士のだろ？」

士郎は、滅也の襟に付いたバッチに指を指した。

「ああ、そうなるな・・・」

滅也が言つとビルの巨大なテレビからニュースが流れてきた。

『本日、三時間前に雑誌社の編集長、秋山ナツキさんが会社の応接室内で殺害され、その後現場にいた海妙寺可憐さんを逮捕しました。可憐殺人容疑者は、秋山ナツキさんの殺人を否認しております。警視庁では、秋山ナツキさんとの関係について取調べしております。』

二人は、可憐がテレビに映っているのに驚いた。

「えーーーーー！！！？？」

士郎が叫んでおり滅也も驚いて固まった。

「可憐が殺人容疑だって！？」

滅也は、やっと口を開いた。

警視庁の取調室

可憐は、警官に手錠を掛けられ周りが殺風景の暗い部屋にいた。

「君の裁判は、仮面ライダー裁判制度で行われる。」

可憐が向いている正面には、数個の画面がありそれぞれの画面からスピーカーを使い可憐に言う。

「仮面ライダーで裁判？」

可憐は、スピーカーから出ている声の人物の言っている意味が解らなかった。

「す・すいませ〜ん。もっと具体的に説明してください・・・」

可憐は、学校の中で成績の悪いオール1、2であり細かい事が理解できなかった。

家計以外全く駄目。

「はあ~~~~~」

スピーカーから声を出している人物も2、3回同じ事を言っても理解できない可憐に呆れていた。

「これが最後だからしつかり聞きたまえ！仮面ライダーがそれぞれの意見を闘いと言う公判でぶつけ合う制度だ。ライダーバトルが始まっている。仮面ライダーに選ばれた者たちは、ミラーワールドと言う鏡の世界で最後の一人に成るまで戦い続ける。検事と弁護士、事件の関係者が選ばれる。そして最後に残った一人が君に判決を下す！」

可憐は、彼らがとんでもない事を自分にしようとしているのに初めて悟った。

「けど、そんな事で正しい裁判が行われる何ておかしい！」

可憐は、睨む。

「意見を持った者が直接ぶつかり合い、勝ち残った者が判決を下す。仮面ライダー裁判制度は、もっとも合理的で公正なシステムだ。」

ミラーワールド

「ぐう！」

仮面ライダーシザーズは、仮面ライダーベルデの攻撃で柱にぶつけられた。

「お前は、どっちだ！？有罪か無罪か！？」

「私が立件して以上有罪だ！それ以外有り得ない！」

仮面ライダータイガと戦っている仮面ライダーゾルダが二人の話に割り込む。

「とう！」「はあ！」

タイガとシザーズがゾルダ、ベルデに蹴りや殴り距離を置いた。

I STRIKE シザーズ VENT I

「とあー！」

シザーズは、シザーズバイザーでカードを挿入しそのままSTRIKE VENTでベルデに攻撃した。

「CLEAR VENTベルデ」

ベルデは、シザースの攻撃が当たる前にCLEAR VENTで姿を隠す。

「ぐああああー!!」

シザースは。ベルデの見えない攻撃に逃れる術が無く倒れた。

「ぐああああー!!くうー!!」

バン！バン！

ゾルダもタイガのFINAL VENTに掛かる前にゾルダバイザーを使い逃れる。

ベルデは、止めを刺す前にシザースが行き成り土下座して来た。

「や・・・やめてくれ・・・もう解った・・・俺の負けだ・・・」

ベルデが攻撃を止めて自分の後ろをシザースに見せようとしている。

「ゴウ！畏だ!!」ベルデの後ろを向いた瞬間にタイガがベルデに對して叫んだ。

「ADVシザースENT」

シザースの契約モンスターがベルデを襲う。

「SHOOT VENTゾルダ」

ゾルダもタイガに砲撃をした。

「お前も死刑に成れ！」

ドーン！

ゾルダがSHOOT VENTを発射した。

そしてタイガの方から黒い霧が出て来る。

「たあ！」

ベルデは、ADVENTカードを使わず片手からサーベルを出しシザースに青い雷光をサーベルから出して攻撃した。

ビリビリビリ！！

「グアアアアアアアア！！」

シザースは、爆発した。

「何！？」

ゾルダもタイガに止めを刺したと思ったが黒い霧からタイガが無傷でいる。

『FINAL VENT』^{タイガ}

タイガがFINAL VENTを使った。

タイガの契約モンスターにつかまれたゾルダは、そのまま地面に引きづられてタイガに渡される。

「貴様！その姿は、何だ！？」

ゾルダが見るとタイガのさっきまでの姿とは、違い体には、強力な鎧に覆われていた。

「ぐああああー！！」

ゾルダもシザーズ同様に爆発した。

「ガイ大丈夫か？」

ベルデが仮面ライダータイガの変身している人の名前を呼ぶ。

「それは、コッチのセリフだ。ゴウ。」

タイガは、ベルデ事をゴウと呼んでいる。

「ここに居ましたねゴウ、ガイ。」

火の鳥のモチーフの仮面ライダーと亀のモチーフの仮面ライダーがベルデとタイガにやって来た。

「レイ、シンどうだ？」

ベルデは、火の鳥の仮面ライダー：アポロと亀の仮面ライダー：トリトンに向かって本名で聞いてきた。

「いいえ・・・全然駄目でした。」

アポロ：レイは、横を振った。

「私の方もレイと同じです。」

トリトン：シンも同じ様子。

「我々四聖獣は、地上で行方不明の守護天使達を探す事だが・・・まったく手がかりが無いおまけに白蛇のナツキは、何者かに暗殺されてしまう・・・どうすればいいんだ!？」

ベルデは、焦りと不安に成っていた。

四聖獣達は、天界の女神から地上に居る守護天使の行方が解らなくゴウ達、四聖獣を地上に派遣した。

キイイイーン!

四聖獣が話しているとブレーキ音が響き向くと蝙蝠のモチーフをした仮面ライダーナイトがバイクから降りて現れた。

「貴様らに話がある・・・」

ナイトが四聖獣に向かって話しかけた。

タイガがナイトにやって来る。

「ワリイが今取り込み中なんだ・・・後に ギイン! うわっ! 何

しやがる!!?」

ナイトは、何の躊躇いもなくタイガにナイトバイザーで攻撃してきた。

「ガイ!」

ベルデ達がナイトを囲んだ。

「行き成り何だ!返答しだいでは、済まないぞ!」

ベルデが睨んでもナイトは、怯まなく剣をベルデに向けた。

「俺も貴様らの答えによつては、済まないな・・・」

ナイトは、四聖獣達に何かを聞きたいらしい。

一方、警視庁の接見室に可憐が居る。

ガタン！

ドアから士郎と弁護士の滅也の姿が来た。

「滅也あ~~~~~！！」

可憐は、泣きながら滅也に駆け寄った。

「あー、あー、解ったから泣くな可憐。」

滅也は、泣き喚く可憐をなだめる。

「滅也・・・弁護出来るのか？」

滅也の後ろにいる士郎は、弁護出来るのか不安だった。

「失礼ですが関係者以外「大空滅也。この少女の弁護士だ。」「俺は、助手の衛宮士郎です。」

割り込んできた警官に弁護士バッチを見せながら言う。

「失礼しました！」

警官は、敬礼した。

「可憐・・・一体何があつたんだ？」

士郎が可憐に聞く。

「解らない・・・行き成り私の目の前で倒れたの・・・」

可憐本人にも解らない様だった。

「あの・・・」

滅也は、隣から声がして見ると二十代後半の眼鏡を掛けた青年。

「アンタは？刑事には見えないな・・・」

滅也は、雰囲気でこの男が刑事でないと悟った。

「僕は、睦吾郎。」

吾郎は、滅也に自己紹介した。

「殺されたナツキ編集長にお世話になった者です。」

「おい！可憐は、殺していないよな！？」

滅也が吾郎に聞いてきた。

「いいえ・・・僕は、就職が決まらない時にお世話になったナツキさんにお礼を兼ねて内定報告に来た頃にナツキ編集長は・・・」

吾郎は、悔しい気持ちで一杯でもあった。

「す、すまないな・・・アンタも大事な人を失ったのに問い詰めた事を聞いてしまって・・・」

滅也は、吾郎に謝罪した。

「とりあえず、僕の家に行きますか？お友達には、悪いんですけど・・・」

吾郎は、可憐を見ながら言う。

「（もしかしたら！）滅也、行って来て良いよ。」

可憐は、滅也がこの世界での役割が在ると思いつた。

「わかった。必ず助けるからな！」

滅也は、吾郎の家に行くので士郎も同行する事に成った。

(必ず無実を証明してね滅也・・・)

可憐は、接見室から願う。

「おい！」

「何ですか？」

道の真ん中で滅也が吾郎に言い。

「アンタの家族何人だ？」

滅也は、吾郎に変な事を聞いていた。

(どうしたんだ滅也?)

士郎が不思議そうに滅也を見ている。

「えっ……と十二人居ますけど……」

吾郎は、滅也に言いたくなさそうに言った。

ガシ！ ダツタツタツタツタツ！

「え？滅也！？どうしたんだ？」

滅也は、士郎を吾郎が聞こえない隅に行く。

「士郎……もしかしたら天使のしっぽのキャラクターなのかもしれない。」

滅也が気まずい雰囲気と言った。

「天使のしっぽってこの世界に来る前に言っていた言葉だよな。何なんだその世界は？」

「ああ、その世界には主人と悲しい別れをした動物達が天使として転生する世界だ。」

滅也が士郎に言う。

「まあ、とりあえず・・・行ってみようか？」

士郎は、一応滅也に彼の自宅まで行く事を勧めた。

「そうだな」「何を話しているんですか？」　ビク！　「いいや、何でもない！」

滅也と士郎は、吾郎の声で驚いて一緒に言った。

「着きました。此処が僕の住んでいるマンションです。」

吾郎が言う目の前の白い二階建てのマンションを滅也達に説明する。

「話が別に成るが吾郎もアノ事件の関係者だろ？それじゃあ。」

滅也が言つと吾郎が頷きポケットから龍の紋章が刻み込まれたデッキを吾郎は、見せた。

「本当は、事件に成る前に在ったんですけど・・・」

吾郎は、このデッキを入手する話も言いたくなかったので滅也が言おうとすると

「「「お帰りなさい！ご主人様！！」」」

いつの間にか三人の少女が吾郎の足元を抱き締めていた。

「ただいま、ナナ、ルル、モモ。」

吾郎は、笑顔で言った。

「ご主人様、この人達は誰？」

青髪のナナと呼ばれる少女が滅也達を吾郎に聞いてきた。

「うん。紹介するよ。スーツを着ているのが大空滅也さんで此方の人が助手の衛宮士郎さんだよ。」

吾郎が滅也達の事をナナとルルとモモに紹介した。

ガシ！

「え？」

士郎が下を見るとナナ達が士郎に寄っていた。

「ねえねえ！士郎兄ちゃん！ナナ達と遊ぼう！」

「ルルも！ルルも！」

「あの・・・モモも良いですか・・・？」

三人は、士郎に囲み士郎も混乱していた。

「士郎。ちょうど良かったな。お前、子供や動物が無茶苦茶好きじゃないか。オレは、吾郎と話が在るからじゃ！」

滅也は、その場を立ち去り後ろから士郎が「め・・・滅也あー！ー！ー！！！」と叫び声がしていた。

「大丈夫何ですか？お連れの人は何？」

吾郎が心配そうに言う。

「大丈夫！大丈夫！アイツは、一応英雄だから！」

滅也は、サラツと言い返し吾郎の方も滅也が士郎を英雄と呼んだ事に疑問に成っていた。

ガラン

吾郎が部屋のドアを開けると台所から15歳位の少女が来る。

「おかえりなさいご主人様。この人は？」

少女は、吾郎に言う。

「おい！お前！ご主人様って・・・もしかして・・・このケダモノ！！！」

滅也は、この少女が吾郎をご主人様と呼んでいてドン引きした。

「違いますよ！落ち着いて下さい滅也さん！」

吾郎は、咄嗟に説得した。

「もしかしてアンタの名前は、ランって言うんじゃないだらな？」

滅也は、吾郎をスルーしながら少女に聞く。

「はい、私がランですけど……」

ランは、滅也にそう答えた。

「って事は、お前が聖者様って奴か？」

滅也が言うつと吾郎とランは、顔色を変えて驚く。

「そう慌てるな。オレは、旅人だ。色んな情報を持っている。」

「旅人？」

吾郎は、滅也が可憐の弁護士なのに本当は旅人と聞いて驚いた。

「っでランだっけ？アンタは、吾郎のお世話をしている守護天使の一人だらな？」

滅也は、ランにそう言った。

「ええ、そうですけど。」

ランは、この滅也が何で自分の詳細を知っているの不思議だった。

(まあ、アニメの世界なんて言えないな・・・)

滅也は、部屋の天井を見ながら思う。

「っとまあ、こんな感じだ。」

ランにもわかり易い様に説明した。

「可哀想に・・・」

ランは、滅也のガールフレンドの可憐が行き成り犯人にされそうだと知って可哀想に思う。

「ところで、吾郎がライダーバトルに参加しないのは、可憐が犯人じゃなく他に居るからか？」

滅也が吾郎に尋ねると考えていて心辺りがある表情をしていた。

キイイイイン キイイイイイン

「「「!?!?!?!」」」

鏡や物を写す反射物から音がして来る。

「アレがミラーワールド・・・」

滅也は、鏡からナイトと他の四人のライダーが戦っている所を見た。

「ご主人様！」

ランは、吾郎の顔を見ながら心配する。

吾郎は、ポケットからデッキを抜こうとすると滅也が止めた。

「オレが行って来る。」

滅也は、鏡に向かって行く。

「ちょっと待って下さい！ライダーじゃないのにどうやって!?!?」

吾郎が言つと滅也は、スーツの上着からバックルとカードを出した。

「悪いがオレも仮面ライダーで可憐の弁護士だ。」

吾郎に滅也が言い返す。

滅也は、バックルを腰に付けてカードを挿入した。

「変身!?!」

ー仮面ライダーディケイドー

「たあ！」

ディケイドは、鏡の中に入って行った。

「ご……ご主人様？」

「う・・嘘・・!?!?」

二人は、見た事無い仮面ライダーで驚いていた。

ギーン!

「ぐう! コイツ出来る!」

ナイトの攻撃がベルデに直撃した。

「待ってください! 我々は、勝負などは!」

アポロがナイトに言った。

「俺は、勝負なんて興味ない!」

ナイトは、四聖獣に言った。

「だったら!」

「俺は、妻のナツキの仇を探している!」

ナイトは、ソードベントをベルデ達に構えて言った。

FINAL ナイト VENTURE

ナイトがナイトバイザーでカードを挿入した。

ガシ!

ジャンプする前に何かの手が邪魔をして発動しない。

「まあ!待てよ!」

ナイトの手を掴んでいたのは、ディケイドだった。

「はあ!」

ナイトは、ナイトバイザーで攻撃をしてきたがディケイドがミラーワールドとは違うカードをナイトに見せて止まる。

「!?!何だそのカードは?」

ナイトがディケイドに聞いてきた。

「これは、アンタ等のカードと違う。俺は、弁護士だ。ちょっとア

ンタ等に聞きたい事がある。」

デイケイドは、ナイトだけじゃなく後ろのベルデ達にも言う。

ドオオオオン！！

「「「「「「ぐああ！」「」「」「」

デイケイドがベルデ達に聞こうとしたら麒麟の仮面ライダーと鳳凰の仮面ライダーがデイケイド達を襲った。

「何なんだあいつ等?!」

デイケイド達は、壁に隠れて居た。

「恐らく、立件した検事達だろ。」

ナイトがデイケイドに言った。

「何だかムカつく・・・！可憐を無罪にしたく成ってきた！」

デイケイドは、二人の仮面ライダーを睨む。

「とりあえず、我々も此処から退散しましょう！」

トリトンがデイケイド達に言った。

「今は、それしかない様だしな！」

デイケイドは、ベルデ達を連れて自分がミラーワールドから来た鏡

に向かって走る。

ナイトは、別の鏡から逃げって行った。

ドンー

「ぐー!」「わあー!」「うおー!」「うっうっ……」「……」「……」

変身を解いた滅也とベルデ達は、吾郎の家にギューギュー詰めに成っていた。

「ー!ゴウさん!レイさん!ガイさん!シンさん!?!」

吾郎は、ミラーワールドから出て来たベルデ達に驚く。

「四聖獣様達が何故地上にそれもミラーワールドに?」

ランも混乱していた。

「おお!これは、聖者殿!」

ゴウ達は、吾郎と顔見知りの様らしい。

「知り合いなのか吾郎?」

「はい。この人達は、四聖獣のゴウさん、レイさん、シンさん、ガイさんです。」

吾郎がゴウ達を紹介した。

「俺は、大空滅也。ナツキと言う人が殺されて勝手に現場に居た可憐の弁護士をやっている者だ。」

滅也は、堂々とゴウ達に答える。

「お前！ナツキを殺した真犯人を知っているのか？」

「ああ、多分そいつ等は、ライダーバトルに参加しているとオレは考える。そして最後のライダーに成って可憐の無罪をしてやるうと思っっている。特にあの二人のライダーが気に入らねえ。」

滅也は、ゴウ達に自分がライダーバトルに参加する目的を説明した。

「けど、四聖獣様達は、何でデッキを持ってらっしゃるんですか？」

ランがゴウ達に聞く。

「実は、女神・・・いやユキから貰ったんだ。」

「ええ！？ユキからですか？！」

吾郎は、ゴウ達からその真相を聞いて驚いた。

「ああ・・・今、多くの地上に居る守護天使達が行方不明に成っているんだ。多分これから守護天使絡みの事件に成って来るとユキか

ら聞いてしばらくの間は、ユキの力でライダーバトルに参加する事になった。」

ゴウ達がデッキを滅也達に見せる。

「まずは、吾郎。」

「何ですか？」

滅也が吾郎に聞いた。

「お前心辺りが在るのか真犯人に？」

滅也は、ミラーワールドに入る前に吾郎が知っている様な顔に見えたから。

「まあ、此処で居るのもなんだしな。それに外で士郎がちびっ子トリオに疲れていると思うし現場に行くだろアンタ達も？」

滅也がゴウ達に聞いた。

「そうだな・・・」

ゴウも滅也の意見に賛成だった。

「此処で居るのも何なんで。」

シンも此処に居ても何にもならないと思う。

「せっかく聖者様の家に来てツバサさんに会えないのは、残念です

が・・・」

レイは、好きな守護天使のツバサに会えないのが悔しいらしい。

ガチャ！

ドアから誰かが入って来た。

「め・・・滅・・・也あ・・・た・・・すけて・・・」

士郎が何故か疲労困憊の顔に成り今にも倒れそうな様子。

「士郎兄ちゃんまだまだナナ達と遊ぶんだから！」

「ルルまた飛行機ごっこがしたいよ～～～！」

「モモは、・・・逆上がりの練習を・・・」

士郎の腰には、ナナ達が群がっていた。

「もう駄目でしょう！すいません・・・」

ランがナナ達を説得してようやく士郎は、解放される。

「大丈夫かお前の連れは？」

ゴウが滅也を見て言った。

「大丈夫、大丈夫！英雄だからコイツは。」

滅也が言っているが士郎は、床に倒れている。

滅也は、士郎を背負って吾郎が現場にゴウ達も連れて行った。

「滅也・・・俺達は、少し気になる事がある。先に行ってくれ。」

ゴウ達がジャーナルに入ると何かの気配を感じたのか入り口に戻って行った。

編集室に入ると吾郎が二人の人物を連れて来た。

「私が副編集長のユダです。」

「課長のルカと言います。」

ユダとルカは、滅也と士郎に挨拶をした。

「弁護士の大空滅也だ。」

「助手の衛宮士郎です。」

滅也達も挨拶をした。

「吾郎くん、一つ新しい情報が入ったんだ。」

ルカが吾郎に言う。

「何ですか？」

「殺されたナツキ編集長の夫の・・・君の相棒の秋山連さんが仮面ライダーナイトとしてライダーバトルに参加しているらしい。」

「連さんが！そんな・・・」

吾郎は、残念そうに言った。

「おい、秋山連って誰だ？」

滅也が吾郎に聞いた。

「本職の獣医で看護師をやっていた人です。アルバイトをやっていた頃からの付き合いの在る人でした。」

吾郎が連について話した。

「事件の事で聞きたいんだが。」

滅也は、ユダ達に聞く。

「許せません！話を聞く振りをして編集長をケーキの為に用意されたフオークで！」

ユダが怒りの声で言い、ルカも拳を握り閉めていた。

「他に目撃者は？」

吾郎も聞いた。

「いいや、あの部屋は、未室だった。」

ルカは、言い返えず。

「だが、何でアンタ等がそんな事を知っているんだ？警察でも解らない事を。」

滅也は、冷静な口調だったが何故か目に怒りが溜まっていた。

「そういえば！」

士郎も不思議に思った。

「お前等も事件の関係者だろ？だったら、ライダーに選ばれたって事だよな。」

滅也は、バツクルとカードを出した。

「なら、闘いで判決を下しましょう！」

ルカとユダは、デッキを出す。

「オレは、お前等が気に入らねえ。可憐を勝手に犯人扱いしやがって！変身！」

「仮面ライダーディケイド」

ルカ、ユダは、鏡の前に立ちデッキを翳して「変身！！」

ユダは、鳳凰の仮面ライダーにルカも麒麟の仮面ライダーに変身した。

「勝てよ滅也！」

「おう！」

士郎が言つと滅也は、左手でグーをしてミラーワールドに向かった。

「我々に勝てるライダーは、居ないぞ・・・」

ルカがディケイドを挑発した。

「ああ・・・みんな、そう言うんだ！」

バン！

ディケイドは、銃モードでルカに撃った。

ルカとユダは、銃を軽々と交わした。

ISWORD VENT(?????)

二人は、カードに自分達のバイザーに挿入して鳳凰の羽をした剣と麒麟の頭をモチーフにした剣を出してディケイドに攻撃してきた。

ドン！

「ぐああああー！」

ディケイドは、二人のコンビネーションに飛ばされた。

「ADVENT(?????)」

「キイーン!!」「ヒイーン!!」

デイクイドの目の前に鳳凰と麒麟に似たユダとルカの契約モンスターが出てきた。

デイクイドが自分達の契約モンスターと戦っている最中にまたカードをバイザーに挿入した。

「SHOOT VENT(?????)ユダ」

「STRIKE VENT(?????)ルカ」

ユダは、真紅のキャノンを出しルカも麒麟の頭のような武器を出した。

「「はあ!!」「」

「ボウ! ビリ!

「ぐああああ!!」

ドン!

デイクイドは、また飛ばされた。

「アノ糞野郎ドモ!!……!?!」

デイクイドは、横を見ると仮面ライダーエンペラーが自分の契約したガゼルのモンスター達を連れて現れる。

「バトルに参加しているライダーは、我々だけでは無い・・・」

二人は、デイケイドが他のライダーと交戦しているのを見計らって別の場所に移動した。

士郎と吾郎は、滅也に頼まれて秋山連の自宅に居た。

「弁護士助手だって？」

連は、部屋で立っている士郎の方を見る。

「はい、秋山連さん。貴方が現場に居た理由を聞かせてください。」

「ナツキに会いに来たかったただけだ。その日は、結婚記念日で楽しみにしていた・・・」

連は、急に悲しい表情に変わった。

「けど・・・連さん！何年も会っていないのに何故急に結婚記念日に？」

吾郎が士郎と連の話の輪に入って来る。

連は、吾郎の前で無言に成った。

「？」

士郎は、部屋の隅に『獣医助手免許』と書かれた物を見たが連が無言で『吾郎に言っちな！』と言っている様に見えた。

士郎は、連にも考えがあるんだと思い黙った。

「これだけは、言える。俺は、今でもナツキを愛している。」

連は、立ち上がるとポケットからナイトのデッキを持ってディケイドと他のライダーが戦っているのを窓ガラスから見て構える。

「連さん・・・それは!？」

連は、何も吾郎に言わなかった。

ガシ!

吾郎は、連の肩を掴んだ。

「何で黙っているんですか!？もしも・・・黙っているんなら僕も・・・」

吾郎は、龍騎のデッキを取り出す。

「勝って真実を知ります！」

連と吾郎が構えると窓ガラスからベルトが出てきた。

「変身！」 「変身！」

連は、仮面ライダーナイトに変わり吾郎も紅い龍の仮面ライダー仮面ライダー龍騎に成った。

ナイトと龍騎は、鏡の中のミラーワールドに入って行った。

士郎は、部屋にあつた『獣医助手免許』を見る。

その隣に写真立てが飾ってあつた。

「え!？」

士郎は、写真立てを見ると亡くなったナツキ編集長と連の仲睦ましい笑顔に満ちた写真であつた。

(本当に・・・連さんがナツキ編集長を?)

士郎は、連が犯人で無いと思ひ始める。

ミラーワールドで龍騎とナイトが相互の目の前にいた。

「連さん！教えてください！本当の事を！」

「……………」

それでも連は、黙っている。

「ぐあああ！！」

「！！！？」

二人の間にエンペラーが飛んできた。

「退け退け！！」

ディケイドは、カードケースからカードを取り出しバツクルに挿入した。

「ファイナル・アタックライド ディケイドー」

エンペラーの目の前にディケイドの無数のカードが現れてディケイドがその中からキックをした。

「退くなよ！退いたら痛いぞ！」

ドオオオオオン！！

エンペラーは、爆発した。

「はあ！！」「てりゃ！！」

ドン！！

「ぐあ！！」「」

龍騎とナイトは、後ろからユダとルカの攻撃を受けて倒れた。

「！！」

デイケイドも吾郎と連が攻撃した事に気づきユダ達を見る。

「秋山連だな？」

ダン！！

「くう！！」

ユダは、ナイトの答えを聞くのを無視してナイトに回し蹴りをした。

「連さん！？・・・！！」

龍騎の前にルカが立ちはだかった。

「聖者殿・・・貴方の相手は、私です。はあ！ バンバン！ ！？」
ルカが龍騎に向かって走り出そうとした瞬間ディケイドの銃に当る。
「吾郎・・・代わってくれないか？こいつ等には、借りがあるから
よ・・・。」

龍騎の前にディケイドが現れてルカを睨んだ。

「滅也さん気を付けて下さい！」

「ああ・・・気遣い感謝するぞ。」

ディケイドが龍騎の代わりに戦う事に成った。

「どう言うつもりだ？」

ディケイドの隣に居るナイトが聞いた。

「なぐに・・・オレは、こいつ等が気に入らないだけだ。」

「ああ、俺もこいつ等が気に入らない。」

ナイトもナイトバイザーを構える。

「意外と気が合うな。」

「いくぞ！」

「おう！」

二人は、ユダとルカに攻撃を仕掛けた。

ディケイドは、ルカに正拳を放ちルカも瞬時に交わり体制をディケイドに有利にさせない為に隙の無い構えを取る。

ナイトは、ユダの懐に潜るとナイトバイザーを振るが剣を交わり膝蹴りをする。しかし、ナイトも見事に避けた。

「くそ！」

「隙が無いぞこいつ等！仕方ない・・・応援を呼ぼう！」

ディケイドは、カードケースから二枚のカードを出し一枚目のカードをバツクルに挿入した。

「コールライド・クイーンオブバンパイヤー」

瞬時にカードが映像化してその中からエプロン姿の萌香が出てきた。

「え！？たしか・・・月音の朝ごはんを作っていたのに・・・！？」

キヨロキヨロ

萌香は、知らない場所に戸惑っていた。

「・・・？」

ユダとルカは、行き成り人が出てきて驚いた。

「よっ！」

デイケイドが萌香に手を振った。

「あ！滅也くん！」

「・・・ごめんな！」

「え？」

「ファイナルフォームライド・ク・ク・クイーンオブバンパイヤー

デイケイドが二枚目のカードを挿入すると萌香の髪が桃色から銀髪に代わり緑の瞳も赤い瞳に変わった。

「何の用だ？クラッシュャー・・・」

ギロリ！

裏萌香の睨みにデイケイドだけでは、無くナイトも怖がっていた。

「ん？」

裏萌香がデイケイドと離しているとルカとユダが自分達のADV
ENTカードからSHOOT VENTとSTRIKE VENTを
出してデイケイド達を攻撃した。

シュッ！

三人は、軽く交わした。

「おい！私も参加させる。こいつ等は、私も気に入らない。」
裏萌香もデイケイドとナイトに参戦する事になった。

「ああ、最初からそのつもりだ。そんじゃあ、変身！」

デイケイドは、カードをバツクルに挿入した。

ーフォームライド・キバー

デイケイドは、キバに変身した。

「す・姿が変わった？」

ルカは、驚いた。

「この方が良いだろ？」

「ああ。その方が闘いやすい！」

Kデイケイドは、ルカに裏萌香とナイトがユダを相手をする事に成った。

「「はあ！」」

ガシ！

ルカは、Kデイケイドの膝蹴りを片手で受け止めた。

「貴様・・・一体、何者だ！」

「オレは、通りすがりの仮面ライダーだ！」

ドン！

ディケイドがカードを取り出すのを見計らいユダと戦っている裏萌香は、ルカを蹴り飛ばした。

ーフォームライド・キバ・ガルルー

ガルル・セイバーがKディケイドの左手に持つと左肩と腹部の鎖が解き放たれて青色に変化した。

スパ！スパ！

「ぐああああ！！」

ルカは、KGディケイドのスピードに着いて来れなかった。

KGディケイドは、カードをまたバックルに挿入した。

ーフォームライド・キバ・ドッカー

今度は、ドッカー・ハンマーを持つと青から紫に変化して左肩と腹部だけだったのが反対の肩まで鎖が解き放っていた。

ダン！ダン！

KDディケイドの攻撃に飛ばされた。

「くう・・・！」

ルカは、カードをバイザーに挿入した。

I T R I C K V E N T I ^{ルカ}

ルカの体が数体現れた。

I フォームライド・キバ・バツシャー

バツシャー・マグナムを持つと紫から緑に変化して右肩と腹部の鎖が解き放たれた。

バン！バン！

シュツ！シュツ！

ルカは、KBディケイドの銃撃を全て交わす。

I S O R D V E N T I ^{ルカ}

ルカは、バイザーからカードを挿入して剣を持ってディケイドに戦う。

バン！バン！

KBディケイドは、バツシャーマグナムでルカを撃つが分身の錯乱により全てかわされてしまった。

キーン！キーン！

「うわああああー！！」

KBディケイドは、ルカの分身に翻弄され倒れそして通常のディケイドに戻る。

「へっ！やるじゃねえか！」

ーアタックライド・イリユージョンー

ディケイドがカードをバックルに挿入するとルカ同様に無数のディケイドが現れた。

ディケイドは、そのままルカに次々と余裕で攻撃し始めた。

「うぐっ！」

ルカが倒れると分身も消える。

そしてディケイドの分身も消えた。

「さあ！素直に犯人を教えろ！」

ディケイドは、剣を翳してルカに言った。

「・・・・・・・・」

ルカは、喋ら無い。

「はあっ！」

ディケイドは、ルカに剣を振ろうとした時「やめて下さい！」行き成りディケイドの前にベルデ達が止めに入った。

「な・・・何をしやがる！」

ベルデ達に止められたディケイドは、戸惑う。

「ル・・・ルカなのか？」

ベルデ・・・いや青龍のゴウは、かつての知り合いにこんな形で再会する事に戸惑った。

「・・・はあっ！」

ルカは、鏡を使って現実の世界に帰って行った。

「クラッシャー！」

反対側から裏萌香と龍騎とナイトがディケイド達の元に来た。

「行き成りアイツも消えたぞ・・・」

萌香達もユダが途中から消えた事をディケイドに伝えた。

「そっか・・・」

ディケイドは、ルカがベルデ達（ゴウ達）を見て消えた事に驚いた。

「ふっ……まあ良い……楽しかったぞ。」

そしてコール・ライドの効果が消えて萌香も消えた。

「おい！お前等あいつ等を知っているのか？」

ディケイドがそう言つとベルデ達は、戸惑った。

「まあ良い……」

ディケイド達は、ミラーワールドを後にした。

6話：「真犯人」（前書き）

久しぶりの作品なので誤字があると思いますがご理解ください。

6話：「真犯人」

世界の破壊者デイケイド……その瞳に映るものは何か……

士郎は、滅也達の帰りを連のマンションの外で待っていた。

（本当に連さんが犯人何だろうか……）

士郎は、死んだナツキ編集長と秋山連の写真を見てから疑問が離れない。

「しゅみません。」

「ん？」

士郎が振り返るとナナ達と同じ年位の少女が士郎の目の前に立っている。

「衛宮士郎さんでしゅね……」

少女が行き成り士郎の名前を言う。

「！……どうして俺の事を……？」

士郎は、この世界が自分の世界で無いのに何故か少女がその名前を呼んだからだった。

「来てくたせしやい。」

士郎は、少女の言われるままに歩き出す。

ピカッ！

「うわっ！」

突然、少女の目の前が光出して士郎は、あまりの眩しさに目を瞑る。

「・・・此処は？」

さつきまで狭い道路に居た筈が今は、大理石の神殿の様な中に居るのに戸惑う。

「衛宮士郎殿ですね。」

目の前には、妙な服を来た女性と例の少女も女性と同じ様な服装を着ている。

「此処は、天界です。ワタクシは、女神と申します。ピンクと供に貴方を天界に連れてきました。」

士郎は、女性の言っている言葉が理解できなかった。

「な・・・何で俺を呼んだんですか？」

この世界とは、無関係の士郎を呼び出す事を女性に聞く。

「貴方が神殺しの炎を使った・・・究極の闇と光のクウガだからです。」

「

「神殺し？究極の闇と光？」

士郎は、女性の意味不明な言葉に益々疑問に成る。

「かつて・・・神話の時代に大いなる災いの箱を開けた大伸ゼウスがいました。」

女性は、更に説明する。

神話の時代に遡る・・・英雄王ギルガメッシュを倒したクウガは、その後グロンギ達の倒す旅をしていた。

しかし、長く天界を統べていた大伸ゼウスは、慈悲と優しさを忘れて酔狂に走った。

そして大いなる災いの箱を開けた事による災害で地上の生き物の大半が死に絶えてしまった。

クウガの大切だった恋人をその時に失ってしまう。

クウガは、怒りと悲しみに燃えてしまい取り返しのつかない物を手に入れてしまう。

それは、今まで光と闇がバランスを取っていたクウガが闇の力が増した事で完全な究極の闇になってしまったからだだった。

クウガは、天界の門を無理やり開けて天界に侵入すると究極の闇であらゆる命を焼く神殺しの炎を使い天界を火の海にした。

クウガは、ゼウスの宮殿に入ると同時に無関係な天使達を焼き殺し

た。

ゼウスがクウガを魔物に変える力と地獄に追放する力を使ったがクウガの霊石の力は、最早ゼウスに止められる範囲を超えた究極の闇に完全に成っていた。

クウガは、ゼウスに炎を使って焼き殺した。

クウガの怒りが治まるまでゼウスは、クウガの神殺しの炎に焼かれて肉体も魂も焼き尽くされてしまった。

天界から去ったクウガは、ダグバとの闘いに向かった。

「まさか・・・！」

士郎は、自分の前世がそんな事があった事を初めて知った。

「士郎殿・・・怒りと悲しみに身を任せてはいけません・・・それに身を任せた貴方は、真の究極の闇に成ってしまいます・・・」

女性が忠告をすると士郎は、連のマンションの前に呆然と立っていた。

「な・・・何だったんだ・・・今は・・・？」

士郎は、現実的な夢だと思う。

ミラーワールドから滅也達が戻って来た。

「おい！どう言う事が説明しろ！」

ミラーワールドから帰って来たばかりの滅也は、ゴウ達に対して切羽詰まった表情で聞く。

「・・・」

ゴウ達は、滅也の質問に黙ってばかりでいる。

ガシッ！

「おい！聞いているのか！何か返事しろ！！」

滅也は、黙ってばかりいるゴウの胸倉を掴んで怒鳴りつける。

「滅也！落ち着けて！」

士郎が滅也とゴウの間に割って来て滅也を抑える。

「ワリイ士郎……」

滅也も正気を取り戻す。

「どうやら決着がつかなかったみたいだな……」

「ああ。」

滅也は、士郎に答える。

「連さん……何でライダーバトルに参加しているんですか？もしかして真犯人の事を「吾郎……もうこのライダーバトルには、首を突っ込むな……俺が全てを壊した……」

連は、無表情で言う。

「連さん！ パン！」

連は、上着を掴んでいる吾郎の手を振り払うと何処かに去った。

「くっそ！どうすれば可憐を無罪に「か……可憐がどうしたって！？」

滅也達が後ろを振り向くと秀作とセイバーがスーパールの袋を持って呆然と立ち尽くしていた。

「私・・何もしていないのに・・・」

可憐は、牢屋でブツブツと独り言を言う。

キイイインン!

突然見えない壁が可憐に現れ取り込んだ。

「此処は？」

可憐は、周りを振り返ると草原の中に居る。

「可憐・・・可憐・・・」

目の前に男が立っている。

「貴方は！」

可憐は、目の前の男に見覚えがある。

「創也さん。」

可憐は、小さい頃から何時も滅也と自分の面倒を見てくれた滅也の兄：大空創也がいた。

「久しぶりだね可憐・・・もう5年も経つのか。」

創也は、可憐と滅也が12才の時にバイク旅行している最中に行方不明に成っていた。

「可憐いいか？よく聞くんだよ・・・滅也を信じてあげてくれ・・・滅也が世界の破壊者デイケイドと呼ばれても・・・」

「待って創也さん！何故デイケイドの事を知っているの!？」

するとまた見えない壁が現れて可憐を取り込んだ。

「必ず滅也を信じてあげてくれ・・・」

創也は、可憐に最後に言うと元の牢屋の中にいた。

海妙寺家

パカッ！

鍋の開く音が聞こえる。

「さあ！遠慮しないで食べてね！」

秀作がエプロン姿で滅也達に言う。

「わーい！いただきます！」

「美味しそうなごはんのお！」

「良い匂い・・・」

何故か吾郎と一緒に住んでいるナナ達守護天使も居た。

「秀作さん・・・すみません。」

ランは、秀作にお礼を言う。

「良いんだよ！食事は、沢山居る方が楽しいからね！」

秀作は、まだ料理を作り厨房に向かう。

数時間前には、可憐が無実なのに逮捕されてしまったと聞いて警察に殴り込もうとしたが滅也達に抑えられる。

そして偶然夕飯の買い物に来ていたランと遭遇会って滅也が吾郎に頼んで今居る守護天使達を夕飯に招待するように頼んだ。

秀作は、週に4、5回近所の人々に自分の作った料理で持て成す事が趣味の老人だったのでこの空気を無くす為に吾郎に頼んだワケだ。

「はい！ツバサさんあ〜ん」

レイは、箸を持って食べ物を吾郎の仕える守護天使の一人：インコのツバサに渡そうとした。

「ちょっと！／＼／＼／＼何やっているのさー！」

ツバサは、顔を真っ赤にして遠慮した。

「おじいちゃん！おかわりなの〜〜〜！」

食べ物を軽々と食べていく女の子は、ハムスターのクルミだ。

「はいはい〜」

秀作は、嬉しそうにご飯のおかわりを持ってくる。

キーン！

セイバーが肉団子を取ろうとするとガイの箸もある。

「これは、私が最初に目を付けたシユウサクの肉団子です。」

「オレだってこの肉団子に目を付けたんだ！」

バチッ！バチッ！

セイバーとガイの目と目の間に火花が飛び散る。

「やめろってセイバー！子供が見ている前だぞ！」

「止めないで下さいシロウ！これは、私に対する挑戦状です！」

「上等じゃねえか！」

「落ち着きなさいガイ！」

士郎と猫のタマミが止めるが二人の闘争心は、治まらなかった。

「まあまあ落ち着いて・・・ほら！今日のメインディッシュ、ローストチキンだよ。」

秀作が見せるとガイとセイバーは、落ち着いた。

だが・・・

「わ〜〜！と・・・と・・・鳥を食べるんですか！？」

レイが正気じゃなくなり鶏を取り上げる。

ボウ！

セイバーとガイの心に火が付いた。

「ニクを寄こせ〜・・・」

「鶏さんは、みんなに食べてもらう為に存在する大切な物を・・・取り上げるとは・・・！！」

ガイは、怒りセイバーが鎧を身に纏い両手にエクスカリバーを構えていた。

「セ・セイバー！落ち着け！」

「ガイも落ち着いてください！」

士郎とシンが止めに入った。

海妙家は、何時も以上に賑やかである。

「ごめんなナツキ・・・すまん吾郎・・・」

連は、傷つきながらも道を歩いている。

キイイインンン！

割れた鏡から銀色の仮面ライダーオーデインが現れる。

「仮面ライダーオーデイン？」

連の答えにライダーは、横を振った。

「コレを・・・」

シュツ！

謎のライダーは、行き成り連にあるカードを渡した。

「！」

連は、そのカードを見て驚いた。

『TIME VENT』と書かれたカードだった。

「アンタ何で？」

「私は、ただ弟のガールフレンドの無罪を証明したいだけだ・・・」

ライダーは、可憐を助けたいらしい。

「コレを君の相棒に使わせる。それで彼と君にも真実が解る筈だ。」

ライダーが去ろうとすると「アンタの名前は!？」連が聞いてきた。

「大空創也・・・仮面ライダーシグルドだ。」

シグルドは、無数の銀色の羽と共に消えた。

滅也と士郎と吾郎は、ユダとルカに会社に呼ばれていた。

「最終的に真犯人は秋山連だろう。」

ユダは、滅也と士郎と吾郎にコーヒーを渡すと本題に入って率直に

言う。

「そんな・・・」

吾郎は、連が犯人な事に納得出来ない様子。

バン！

「ふざけんな！どう考えてもお前等がナツキって人を殺したんだろ
うが！」

滅也は、椅子に座っているユダとルカの机を叩いて一喝する。

「証拠は、何処にあると言うのでしょうか？」

「その通りです。」

「くっ！」

ユダとルカは、ナツキ編集長の殺された現場に居なくて滅也が悔し
がる。

「犯人は秋山連・・・」

「秋山連が真犯人？」

士郎は、滅也が諦め口調で言う。

「ああ・・・もう其れしかないだろ・・・」

滅也は、真犯人がルカとユダだと察しているが証拠が無い。

「なあ滅也・・・」

「どうしたんだよ土郎？」

真剣な表情の土郎の目を見た。

「連さんって誰かの為に戦っているんじゃないかな？」

「ああ！誰かに似てる。たとえ自分が地獄に行っても誰かを救いたいと願う馬鹿で優しい奴にな・・・」

滅也は、土郎を見て言う。

「連さんが自分が全て壊してしまったって言ってた。そう言った顔が俺の知っている奴に似ていました。」

「えっ？」

土郎が他の人達に滅也と連を重ねて説明することに滅也が驚く。

「俺の知っている人も自分は、破壊者だって言う。不良ぶっていますぐど本当は、誰かの為に戦っている。俺は、アノ人を秋山連さんを信じてみたい。」

土郎は、連を信じたい気持ちを伝えると滅也が土郎を見て頷く。

「秋山連じゃないなら誰が犯人何ですか？」

ユダが士郎に聞く。

ガラッ！

滅也は、突然席を立つ。

「だったら証拠を見つければ良いんだろ？士郎、吾郎行くぞ！」

滅也は、士郎と吾郎を連れて会社から出て行った。

「って言っても証拠をどうやって見つけるんだ滅也の奴？」

滅也と分かれた吾郎と士郎は、どうやって証拠を見つけるのか解らなかつた。

「吾郎・・・」

目の前に連がボロボロの姿で吾郎と士郎の元に来た。

「連さん！？どうしたんですか！」

吾郎が連の元に駆け寄る。

連は、吾郎に『TIME VENT』のカードを見せた。

「コレは？」

士郎は、変わった絵柄のカードを見て連に言う。

「TIME VENT・・・噂で聞いた事があったな・・・過去に戻る能力を持つカードが在るってな・・・」

連が吾郎と士郎に説明する。

「貴方は、ずっとこのカードを探していたんですね？」

コクン

士郎の質問に連は、頷く。

「どう言う事ですか？」

吾郎は、連がTIME VENTを手に入れる事が気になった。

「俺は、アノ日・・・ナツキに呼びだされた。3年ぶりだった・・・大事な話があるのだが・・・だが一足違いでナツキは・・・だからナツキが何を言いたかったのか聞いて見たかった！」

「でもライダーのカードを裁判以外で使う事は、禁止されてますよ！即ジャッチから外される決まりですよ！」

「俺は、ただ・・ナツキの言葉を知ればそれで良い！」

連もナツキに呼ばれた理由が聞きたかった。

キイイインン！！

「はっ！（ユダ）（ルカ）」

ライダーの姿のユダとルカが鏡の中から襲い掛かる。

「！！」

行き成りの襲来に吾郎と連は、驚く。

「滅也！」

「待っていたぞ！」

デイケイドがユダとルカの邪魔に入る。

「何故此处に！？」

ユダは、デイケイドに聞く。

「ユダ！」

ディケイドの後ろには、ベルデ達もいる。

「ゴウ・・・(ユダ)(ルカ)」

ユダとルカは、ゴウ達もディケイドと一緒に行動している事に目の色を変える。

「分かれる時に士郎が言っていたぞ！本当の犯人が今度は、連の口を封じる為に罪を擦り付けるってな！」

「「！！」」

ユダとルカは、驚いた。

「真犯人は、お前等だ！」

ディケイドは、ユダとルカを指した。

「ユダ・・・本当に白蛇のナツキを殺したのは、お前等か？」

ゴウは、まだユダ達を犯人と思っていない。

「違う・・・我々じゃない！（ユダ）」

「そうだ！真犯人は、連だ！私たちは、それを告白させようとしただけだ。(ルカ)」

ルカとユダは、まだ自分達が犯人じゃないと言い切る。

「オレは、人を信じる事が出来ない。人の痛みを感じる事も・・・」

だから、土郎の・・・仲間の信じる事をオレも信じるだけだ！」

ディケイドが言つと土郎は、頷いた。

「貴方達は、大事な事を忘れていました。（ルカ）」

「我々は、現場から離れた場所に居た。ライダーにも成っていない我々がどうやってナツキ編集長を殺せるんだ？（ユダ）」

ユダとルカがディケイド達に揚げ足を取る。

「その方法もこのカードで解る。」

連がカードを使おうとすると吾郎が止めた。

「僕が行きます！僕も真実が知りたいんです。」

吾郎は、カードを取ると鏡にデッキを翳してベルトが出てきた。

「変身！」

デッキをベルトに装着すると吾郎は、仮面ライダー龍騎に変身した。

龍騎は、ドラグバイザーにTIME VENTを挿入する。

『TIME VENT』
オーティン

龍騎は、時間を遡る。

昨日の新聞会社ジャーナル

ナツキは、同じ天使のゴウ達が着ていた事に気付く。

「ハッ!?!」

滅也は、起き上がると窓を見る。

其処には、ユダとルカが真下に居る。

そして、こちら側に向かって何かを飛ばした。

「ナツキ!」

連がナツキを庇って避けると椅子が見事に切断されていた。

「これは……!」

シンが切断した椅子を見て驚く。

「何なんだよ!」

滅也がシンが見て驚いた物を質問する。

「コレは、上級の天使だけしか使えない気弾!」

シンが驚くと他のゴウ達も戸惑う。

「……もう俺達の知っているユダとルカじゃない!裏切り者だ!」

ゴウは、涙を流しながら決心する。

「だったら泣いていないで行くぞ！」

滅也と士郎が行くとゴウ達も滅也の後を追いかけて行った。

「吾郎、連・・・実はね・・・」連さんに話したい事があるんですよね
!?!」

吾郎がナツキに聞いた。

「連。もう吾郎に本当の事を話してあげて。」

「え!?!」

吾郎は、連を見る。

「吾郎。お前が就職している動物病院のお前の助手にして貰えないか?」

吾郎は、一体何なのか理解できなかった。

「実は、連が先月獣医助手免許を取ったのよ。」

ナツキが何で3年前に会社を辞めたのか初めから知っていた。

「吾郎の相棒で成りたかったら獣医助手免許を取ればって言ったのは、私なの。」

「そうなんだ・・・俺もお前と一緒に動物達の命を救いたいと言う気持ち一杯だったんだ。そんな時会社を辞めるのと同時に獣医の助手の免許を取って言ったのがナツキなんだ。」

(そう・・・俺は、昔怪我していた白蛇を助けた時から一緒に居たのに突然の事故でその白蛇が死んでしまった・・・その時から何が出来たのか解らなかった。でもナツキに出会ってその答えが解った気がする。)

連は、その時死んだ白蛇がナツキである事を気付いていない。

連がナツキを見るとナツキも連を見て微笑んだ。

パチッ

「あの・・・さっき私に降って来たのって滅也と土郎くんですか？」

目を覚ました可憐がナツキに聞く。

「そうだ滅也くん・・・」

吾郎は、滅也達を追いかけに行く。

「おい！吾郎！」

連も吾郎の後を追いかける。

「やっと追いついたぞ！」

滅也達は、ユダとルカを追い詰めた。

『ヒイイイン!!』

『キイイイ!!』

何処からかユダとルカの契約モンスターが現れる。

そしてユダとルカは、デッキを翳すとベルトが出てくる。

「変身！（ユダ）（ルカ）」

ユダとルカは、仮面ライダーに変身した。

「此処は、ミラーワールドでは無い。（ユダ）」

「此処で負ければ命は、無い。（ルカ）」

「そんな闘いで我々に勝てるかな？」

ルカとユダの契約モンスターが滅也達に襲い掛かる。

ボウ！ビリ！

「ぐああ！」

ユダとルカの契約モンスターに滅也達は、倒れていく。

「最も強い者が判決を下す。（ユダ）」

「それが貴方達の決めたルールでしょう？（ルカ）」

「この場で我々が死刑を申し渡す！（ユダ）」

ユダとルカは、倒れた滅也達を見下ろす。

「滅也さぁーん！」

滅也達の所に吾郎と連が来た。

「これは、これは、聖者殿。（ユダ）」

ユダが吾郎を見る。

「僕は、滅也くん達と出会って一人じゃないって解ったんだ！」

吾郎は、ルカとユダを見て言う。

「愚かな！人間は、皆自分の為に戦うのだ！（ユダ）」

ユダは、吾郎にあきれ果てて言う。

「オレ達人間は、時に自分一人の為に戦う時もある。この手で。だが！この手で相手の手を握る事も出来る。その時人間は、弱くても愚かでも一人じゃない！」

滅也は、立ち上がりユダとルカに言う。

「そつだ滅也！今は、俺達がチームだ！」

士郎も立ち上がる。

「それが人間の面白い所ですしね。（シン）」

「ああ！（ガイ）」

「オレ達は、人間じゃなくてもその気持ちを何時でも持っている！（ゴウ）」

「僕達は、彼らから教わった気がします。（レイ）」

四聖獣達も立ち上がる。

滅也は、バックルとカードを出し士郎もベルトを出して構える。

吾郎達もデッキを翳すとベルトが出てきた。

「変身！」

「カメン・ライド・ディケイド」

滅也は、仮面ライダーディケイドに変身した。

士郎もクウガに変身した。

吾郎達は、龍騎、ベルデ、トリトン、タイガ、アポロン、ナイトに変身した。

「貴様！何者だ！？（ユダ）」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

ディケイドが言うと腰のカードケースから何か新しいカードが出てきた。

出て来たカードは、何時も以上にあつた。

「コレからが本当の闘いだ！行くぞみんな！」

「おう！（ベルデ）（タイガ）（トリトン）（アポロン）（ナイト）（龍騎）（クウガ）」

ユダとルカは、デッキからFINAL VENTを取り出しバイザーに挿入する。

『FINAL VENT^{ユダ}（ルカ）』

ポウウウ！！

ビリイイ！！

フェニックスのモンスターの体に大量の炎が現れる。

麒麟のモンスターの体も体に大量の電気を帯びる。

「お前等少しくすぐつたいぞ！」

デイケイドは、ナイトと龍騎に言う。

「えっ！？（ナイト）（龍騎）」

ナイトと龍騎がデイケイドの言う言葉に疑問に成る。

デイケイドは、2枚のカードをバックルに挿入した。

ーファイナル・フォームライド・リュ・リュ・リュウキー

ーファイナル・フォームライド・ナ・ナ・ナイトー

龍騎とナイトは、バイザーでカードを挿入していないのにSWOR
D VENTとGUARD VENTが出て来た。

「はあ！（ユダ）」「とうあ！（ルカ）」

ユダは、SHOOT VENTをルカがSTRIKE VENTを
出してデイケイド達に攻撃した。

ヒュッ！

デイケイド達がユダとルカの攻撃を避けるとナイトと龍騎の体に変
化が現れる。

ナイトは、自分の契約モンスターのダークウィングに成り、龍騎もドラグレッダーに変化した。

「な！何なんだ！（ナイト）」

「コレって？（龍騎）」

ナイトも龍騎に何が起こったのか解らなかった。

『キイイーン！』

『ヒイイーン！！』

ユダとルカの契約モンスターは、ディケイド達に攻撃をしようとする。ナイトダーグウィングとリュウキドラグレッダーが攻撃し返した。

ベルデとタイガは、リュウキドラグレッダーの加勢に行きアポロンとトリトンもナイトダーグウィングの加勢に向かう。

「はあ！」

ユダは、ディケイドの蹴りがかかるがかわされてしまう。

「はあ！」

ルカもクウガに素早い拳を放つが

ダン！

クウガが回避して拳を返した。

ベルデとタイガは、リュウキドラグレッダーと戦っているユダの契約モンスターの後ろに回り込み二人同時に蹴った。

ユダの契約モンスターは、怯んで動けなかった。

「とりや！」

スパッ！ドカーン！

リュウキドラグレッダーは、尻尾のドラグセイバーでユダの契約モンスターを倒した。

アポロンとトリトンもナイトダークウィングの援護している。

「はあ！」

ドカーン！

ナイトダークウィングは、ルカの契約モンスターに体当たりして倒す。

「とりや！（ディケイド）（クウガ）」

ダン！

「ぐあ！（ユダ）（ルカ）」

隙を作ってしまったユダとルカは、ディケイドとクウガの蹴りで倒れる。

ディケイドは、バックルに二枚のカードを挿入する。

「ファイナル・アタックライド・リュ・リュ・リュウキー

ーファイナル・アタックライド・ナ・ナ・ナイトー

リュウキドラグレッダーがディケイドの元に来た。

ナイトダークウィングがクウガの背中に装着して自分のSWORD VENTを持っている。

「はあ！（ディケイド）（クウガ）」

ディケイドとクウガがジャンプするとリュウキドラグレッダーがジャンプしたディケイドの辺りを回りナイトダークウィングもドリル状に変化させた。

「ハアアアアッ！！（ディケイド）（クウガ）」

ディケイドは、リュウキドラグレッダーの口の火炎放射で炎を纏いクウガもドリルのままユダとルカに攻撃した。

「ぐあああああ！！！！（ユダ）（ルカ）」

「バアアアンンン！！」

ユダとルカは、ディケイドとクウガの攻撃で消滅した。

「イタタタタタタタ！！！」

新聞会社ジャーナルでは、滅也と士郎が可憐の関節攻めにあっていた。

「滅也・・・士郎くん・・・さっきは、よくも倒してくれたわね！」

ギユウウウウー！！

「ゆ・・・許して！許してくれえ！（士郎）」

「綺麗で優しい・・・可憐・・・ちゃん・・・痛いから・・・本当に関節おかしくなるううー！！（滅也）」

その様子を見て苦笑いする吾郎とナツキと連と四聖獣達だった。

「イタア・・・吾郎・・・コレからどうするんだ？」

滅也は、吾郎に聞く。

「はい！早く立派な獣医に成る様に頑張ります！」

「オレも吾郎の相棒としてサポートしていくつもりだ！」

吾郎と連は、自信満々に言う。

「じゃあな！・・・」滅也待ちなさーい！！」「滅也助けてくれ！」「うわー！やべえー！じゃ、じゃあな！」

滅也は、間一髪で可憐の関節攻めから逃げ出した。

結局滅也も士郎も可憐のお仕置きを一時間食らうことになる。

「えっ！？もうこの世界から行っちゃったの？」

可憐が行き成り別の世界に行く事に驚いた。

「ああ、オレ達のする事は、無いだろうしな。」

滅也は、巻物の絵柄を変えた。

今度の絵柄は、トランプのカードが存在しカードの中にヘラクレス
オオカブトムシの絵がある。

そのカードの上には、鳥の様なドラゴンの様な白い動物の姿が存在
していた。

「今度は、舞HIMEが混じっているのか・・・」

6話：「真犯人」（後書き）

次回仮面ライダーディケイド

「ライダーは、我が風華学園の象徴でありライダーシステムは、我が学園の所有物です。」

「残念だが・・・アンタの所有物には、なれねえ。」

全てを破壊し、全てを繋げ！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0252h/>

仮面ライダーディケイド

2010年10月14日12時02分発行